

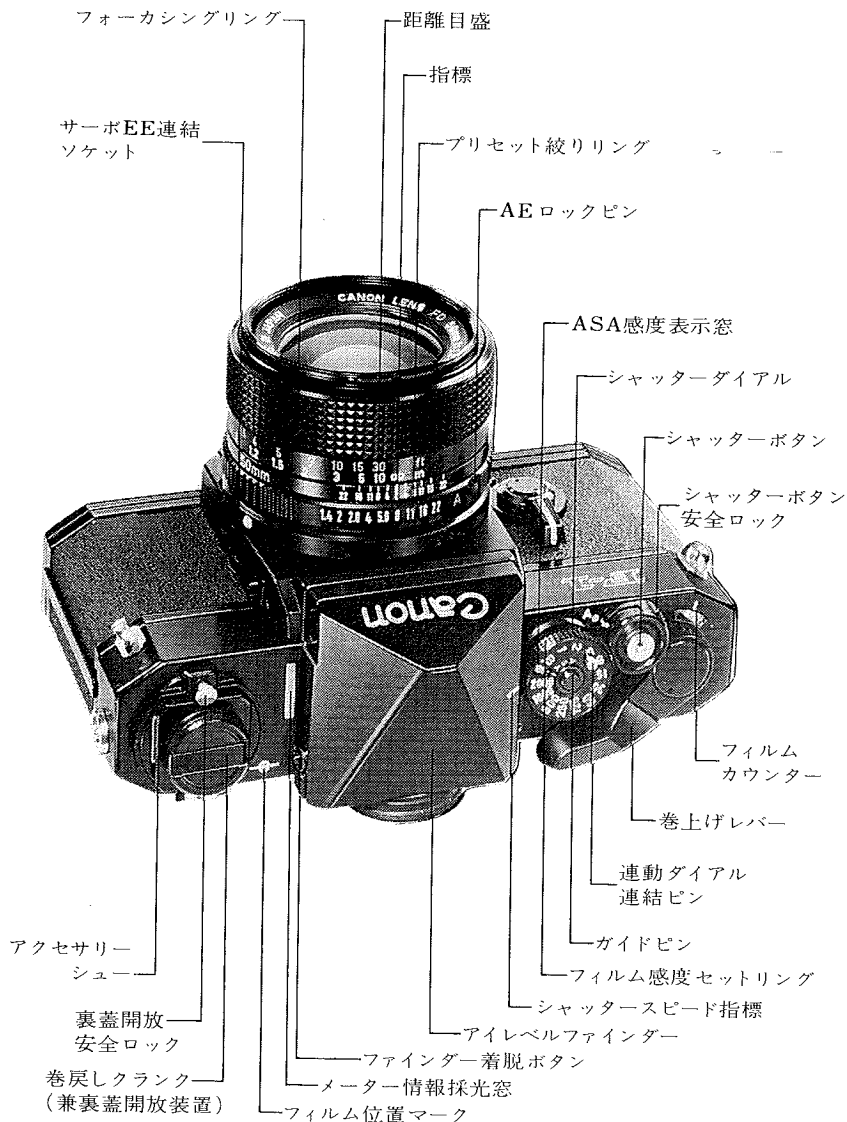


日本語版

Canon F-1



使用説明書



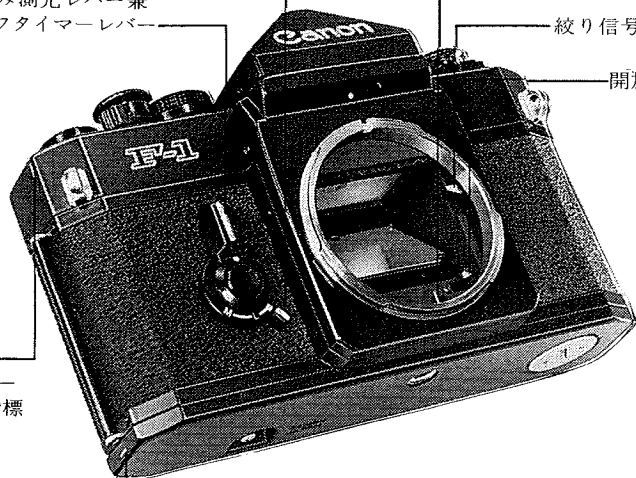
絞込みロックレバー
兼ミラーロックレバー

自動絞り作動レバー

絞込み測光レバー兼
セルフタイマーレバー

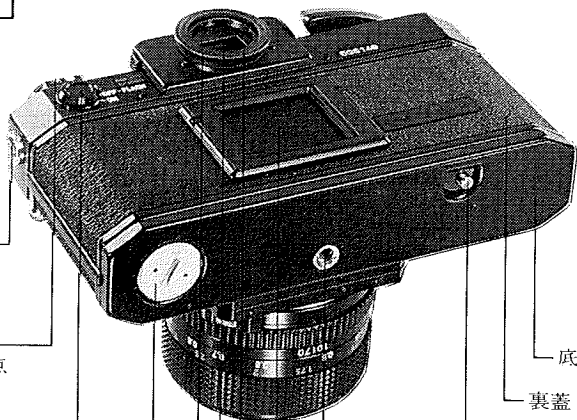
絞り信号連動レバー

開放補正レバー



フィルム
チェンバー
取付け指標

底蓋
取付け金具



フラッシュ
ターミナル

フラッシュオート
コントロール接点
フラッシュ直結接点

メータースイッチ

水銀電池室蓋

視度補正用標準リング

底蓋

裏蓋

巻戻しボタン
兼多重露出ボタン

三脚ねじ穴

メモホルダー

ラバーアイピースリング

ファインダー接眼部

このたびはキヤノンF-1をお選びくださいますことありがとうございます。
とうございます。

キヤノンF-1は総合システムとして交換レンズ、アクセサリーのすべてを一挙に開発したもので、範囲の広さ、性能の高さでは、現段階の最高水準を示すものです。交換レンズの豊富さも比類がなく、特殊レンズの開発をはじめ広角、望遠の整備により、F-1の機能を強化しています。またFLレンズシリーズもすべて完全に使用できるため、レンズに関してのあらゆる要望が満たされます。

アクセサリーでは、モータードライブ、サーボEEファインダー、ブースターTファインダー、フィルムチェンバー250等の主要アクセサリーを含む180種以上のシステムチックな製品化により、あらゆる撮影を可能にしています。したがって撮影目的に応じて必要な製品を自由にお選び頂くことができます。

ご使用のはじめに

まず使用書をお読みください。各部の名称を覚え、操作も順を追って理解した上で撮影してください。



※ この製品の保証書は同封されているご愛用者カードと引き換えにお送りいたします。至急ご愛用者カードに所定の事項をご記入のうえ係宛お送りください。

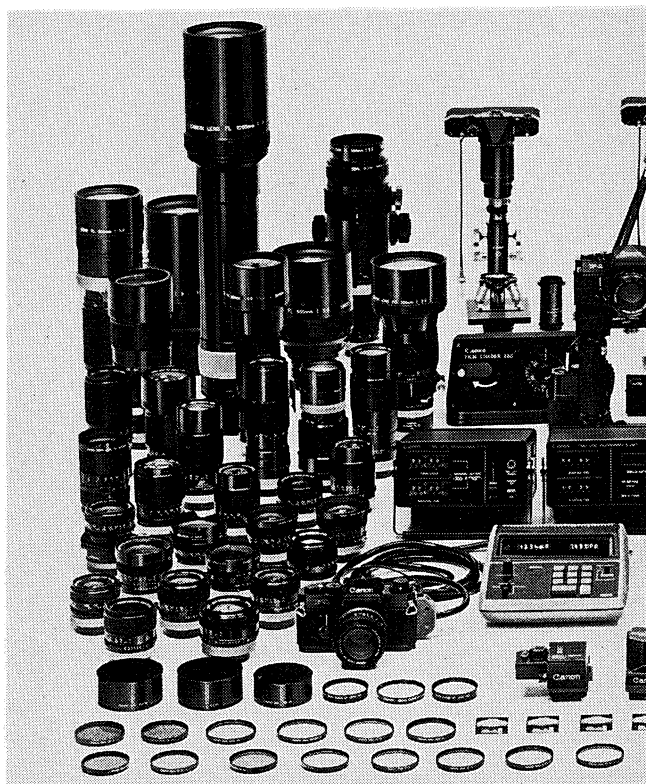
※都合により製品の外觀及び仕様の一部を変更することがあります。

10⁴システムが形成するキヤノンF-1

キヤノンF-1は、写真撮影の技術を高度の専門分野にまで押し広げ、当初から広範囲のシステム機能を考慮して開発された、マンモスシステムの中心機です。

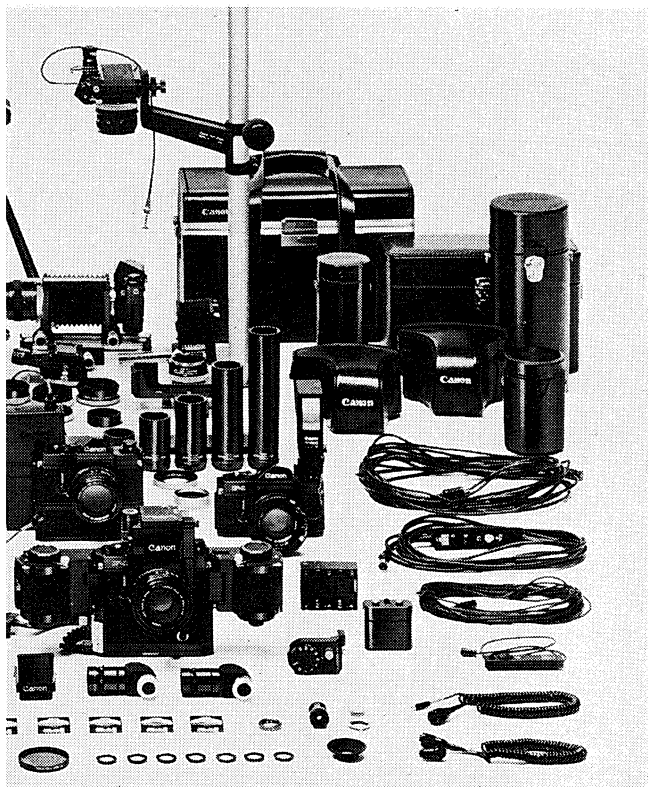
部品10,000点によって構成され、各アクセサリーと本体間に完全互換性ありという精度の高さにおいて、金字塔をうちたてたものです。

もちろん信頼性は、厳しい環境テストによって一段と高め



られシステムを守る背景となっています。

アクセサリには、エレクトロニクス技術を駆使した強力なモータードライブ装置、ユニークなサーボE E ファインダー、微光量測光用ブースターT ファインダー、250 枚連続撮影用フィルムチェンバー 250 を主力に 180 種以上、交換レンズには、新設計高品質のF D レンズシリーズが広範囲に準備され、かつてない機能をお届けいたします。



主な特長とシステム

10万回耐久、高品質のボディ

作動は10万回耐久、部品は1/100mm精度、厳しい環境テストを経た完璧な作動と互換性をお約束します。

ピント面精度、シャッター精度、ミラー作動、巻上げ、フィルム平面性、測光精度などを安定させた基礎構造は堅実で、レンズ、ファインダー、ピントガラス、底蓋、裏蓋等の各交換部も着脱がきわめてスムーズです。

設計検討も十分に行ない、作動分析は高速写真により、材質選択は新素材にまで及び、仕上げは丹念に行なうなどあらゆる面でボディ機能をハイレベルにしています。シャッタースピード1/2000秒も高速化時代への挑戦です。

レンズ群の拡大

広角、望遠、標準、すべての分野において性能拡張をはかりました。性能向上には、ボディ同様の精度をもたせ、解像力、収差補正に厳しい条件を与え、十分に満足すべきものとしています。

キヤノンFDレンズはコンピューターを駆使した大幅な光学設計活動によって生まれたレンズで、独特の焦点調節機構、多層膜コーティング、新素材の投入等可能な限りの技術を盛り込み、キヤノンF-1の撮影分野を一段と強化しています。そのレンズ群は7.5mmから1200mmまで40数本にも及んでいます。

ユニバーサルな測光システム

開放、絞込み、AE、微光量、無人。

キヤノンFDレンズシリーズおよびアクセサリーの開発と相まって、レンズ交換式一眼レフとしては可能な限りの信号伝達機構を盛り込み、TTL方式にバラエティをもたせた測光機構です。

開放測光、絞込み測光兼用でキヤノンFDレンズ以外の場合には、絞込み測光で適正露出が決定できます。

またキヤノンFDレンズと各種アタッチメントとの併用により、測光機能がさまざまに展開される機構です。

AE測光

サーボEEファインダーを交換取付けると、開放測光のシャッター優先式AEカメラとなります。

無人撮影

サーボEEファインダーとモータードライブを併用すれば、無人でAE撮影が可能となり、さらにフィルムチェンパー250を取付け、長尺撮影に発展させることができます。

微光量測光

ブースターTファインダーを交換取付けると、絞込みによりEV-3.5まで測光ができ、タイマー連動により長時間露出が容易に行なえます。

独特の中央測光

ピントガラスに最も近い位置にCdS受光体を配置し、中央部の最も良質の光を最大限受光部に送り込む最良の方式です。キヤノンF-1はこの方式を開放で行なうものです。

開放F値自動補正のTTL測光

FTによって確立された絞込みによる中央測光を開放に発展させた独特の測光方式で、キヤノンFDレンズはこの開放F値の伝達を自動的に行うもので、取付け時の調節は一切不要です。開放のまま直ちに測光がはじめられます。

絞込み測光

キヤノンFLレンズは、開放測光信号がない代わりに絞込みによって、正しい露出が行なえるようになっています。したがってキヤノンF-1では、FD、FLレンズのすべてが駆使できます。

多目的のファインダーシステム

着脱式で最も良く検討されたシステムとなっています。交換ファインダーには、サーボEEファインダー、ブースターTファインダー、標準のアイレベルファインダー、スピードファインダー、ウエストレベルファインダー等があり、用途によって使いわけることができます。

着脱は、スライド方式できわめて容易です。またフォーカシングスクリーンも交換可能です。

接眼部には、アングルファインダー、マグニファイヤー、視度補正レンズが取付け可能で、使用者の好みおよび用途によって、自由に選択、交換できるようになっています。

明るい視野

標準のフォーカシングスクリーンは、眼の特性に合わせたプリズムのピッチおよび角度を採用し、ピントを合わせやすくしてあります。また高感度CdSによりファインダー内ハーフミラーの反射率を減らし、プリズム各面にはコーティングを施し、視野を明るく、見えもすっきりさせています。さらにゴースト除去も十分です。

明瞭な撮影情報

メーター指針、追針、チェッカー定点、警告マーク、シッタースピード等のメーター情報をファインダー視野外に抜出して見せますから、作画上のわずらわしさがなく、視野も見易くきわめて便利です。

モータードライブMF

1秒間に3.5コマの高速撮影が可能で、アクセサリーのインターバルタイマーLを使用すれば、0.5秒から180秒に1枚までの間で、9段階の時間調節撮影が可能です。

長尺撮影可能フィルムチェンバー250

モータードライブ装置と併用し、250コマの連続記録が行なえます。

リモートコントロールと無人撮影

モータードライブ装置やチェンバーと併用し、ワイヤレスコントローラーLC-1やリモートスイッチを使用すると、リモートコントロールが可能です。サーボEEファインダーを取付けるとAEでリモートコントロールが行なえ、さらにスイッチロックにより無人撮影となります。

その他

サーボEEファインダー、ブースターなどの共通電源システム、オートベローズを中心とする接写、拡大システムのほか、従来の一眼レフ用アクセサリーも使用可能です。

キヤノンF-1主要性能

型 式：35mmフォーカルプレーンシャッター式一眼レフレックスカメラ

画面サイズ：24mm×36mm

レ ン ズ：開放測光用信号レバーをもつFDシリーズ標準および交換レンズ群

標準レンズ：キヤノン New FD50mm F1.2 New FD50mm F1.4 New FD50mm F1.8

ファインダー：取りはずし可能なペンタプリズムファインダー

交換ファインダー：サーボEEファインダー プースターTファインダー スピードファインダー ウェストレベルファインダー

ファインダーアタッチメント：マグニファイヤー 視度補正レンズ ラバーアイピースリング（裸眼 眼鏡兼用型）アングルファインダーA2, B

ピントグラス：フルネルレンズ使用 マイクロスプリットプリズム 距離計つき標準ピントグラスをはじめ9種

ハーフミラーコンデンサー：測光用ハーフミラー付きカットコンデンサー

視野情報：距離計 測光部範囲などのピントグラス情報

メーター情報：メーター指針および追針，不適正露出警告赤マーク，絞込み測光用定点兼バッテリーチェックマーク，シャッタースピード目盛，メーター連動範囲外警告信号

倍 率：標準50mmレンズ無限遠で0.77倍

視 野：実画面に対する比率97%

視 度：標準-1.2ジオプター（ただし標準はリングのみ）視度補正レンズによる交換調節 +3+2+1.5+1+0.5 0 -0.5 -2 -3 -4 ジオプターの10種

ミ ラ ー：クイックリターンミラー ショック吸収機構つき ミラーのはね上げロック可能 ロックした場合自動的に手動絞りにセットされる

レンズマウント：バヨネット式FDマウント FLレンズ，Rレンズ取付け可能

取付け機能：キヤノンFDレンズ—開放測光 自動絞りに連動

キヤノンFLレンズ—測光レバーによる絞込み測光 自動絞りに連動

キヤノンRレンズ—絞りリングによる絞込み測光 手動絞り

シャッター：極薄チタン幕使用 4軸式フォーカルプレーンシャッター 作動音およびショック防止用特殊ブレーキ機構付き シャッターボタンロック可能

シャッターダイヤル：一軸不回転式 シャッタースピード目盛およびASA目盛セット 連動ダイヤル連結ピンおよびガイドピンあり

シャッター速度：B 1 2 4 8 15 30 60 125 250 500 1000 2000

倍数系列等間隔目盛 60はX接点

フィルム感度目盛：

ASA 25 . . . 50 . . . 100 . . . 200 . . . 400 . . . 800 . . . 1600 . . . 3200
(32 40) (64 80) (125 160) (250 320) (500 640) (1000 1250) (2000 2500)

セルフタイマー：内蔵 シャッターボタンで始動 時限約10秒 セルフタイマーレバーは絞込み測光レバー兼用

測光調節機構・開放測光：シャッタースピード フィルム感度 絞り値に連動する
追針式TTL開放測光機構 キヤノンFDレンズの開放F値自動補正機構付 受
光素子に広範囲 高感度CdSを使用しカットコンデンサー後方に配置した中央
測光方式 測光面積は画面の約12% サイズは 12×8mm

絞込み測光：絞込み測光レバー使用による定点式測光 測光レバーのロック可
能 FLレンズ Rレンズの測光および手動絞りに使用

露出計連動範囲：ASA100 EV2.5 (F1.2 1/4秒)～EV18 (F11 1/2000秒)
低輝度の連動範囲外ではメーター情報窓が赤に変換する

メーター用電池：JIS (日本工業規格) MR9 (H-D)型 1.35V 水銀電池1コ使用
米国製 MALLORY・PX-625 EVEREADY・EPX-625に相当

電池チェッカー：内蔵 ASA100 1/2000で確認

TTL開放測光EE：専用サーボEEファインダーとキヤノン標準電源を併用しキャ
ノンFDレンズによる開放測光でシャッター優先式EEとなる
連動範囲ASA100 EV2.5～EV18

超低照度測光：専用ブースターTファインダーの使用によりASA100 EV15
(F22 1/60秒)～EV-3.5 (F1.2 15秒)まで測光可能

シンクロフラッシュ：FPおよびX接点 タイムラグ自動調整式

ソケット：ボディ側面にJIS B型ソケット 巻戻しノブ部には直結カプラー用
フラッシュ直結接点およびフラッシュオートコントロール接点あり

同 調 範 囲：FP級 1/2000～1/125秒 1/30秒以下
スピードライト 1/60秒以下 キャッツは 1/60秒専用
M MF級 1/30秒以下

フィルム装填：多スリット型フィルムスプール採用の迅速装填

巻上げレバー：小刻み巻上げ可能 1作動139°回転レバー 予備角30°

フィルム巻戻し：巻戻しボタンおよびクランクによる 巻戻しボタン自動復帰

多重露出：巻戻しボタン操作により可能

裏 蓋：クランク引上げ式 安全ロック装置付き メモホルダー付き
取りはずしてフィルムチェンバー250の取付け可能

底 蓋：取りはずしてモータードライブ及びパワーワインダーF取付け可能

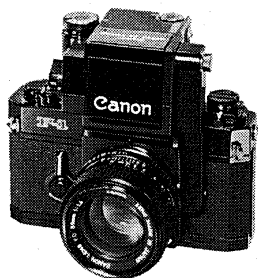
フィルムカウンター：裏蓋開閉に連動する自動復帰順算式

アクセサリシュー：専用 巻戻しノブ部にあり フラッシュカプラーD フラッ
シュカプラーL等の取付け可能

大きさ・重量：146.7×99.5×49.5mm・ボディ845g FD50mm F1.4付 1,085g

目次	・レンズの取り付け方	16
	・水銀電池のつめ方	20
	水銀電池のチェック	
	・フィルムの巻上げ操作	22
	巻上げとシャッターボタン 撮影枚数表示 シャッターの安全装置 ケーブルリリースの取付け	
	・シャッターと絞り	24
	シャッターと絞りの調節 シャッターダイヤル レンズの絞り 自動絞り 手動絞り	
	・ピントの調節	30
	・露出のきめ方	32
	TTLメーターの使い方 その準備(フィルム感度のセット)	
	・開放測光	34
	・絞込み測光	38
	絞込み測光 絞込み測光レバー	
	・ファインダーの交換	42
	フォーカシングスクリーンの交換 交換のしかた	
	・カメラの構え方	46
	・フィルムのつめ方	48
	裏蓋の開き方 フィルムの装填 “正しいフィルム装填”の確認 フィルムの感度表示	
	・フィルムの巻戻し	52
	・セルフタイマー	54
	・フラッシュ同調	56
	露出の決定	

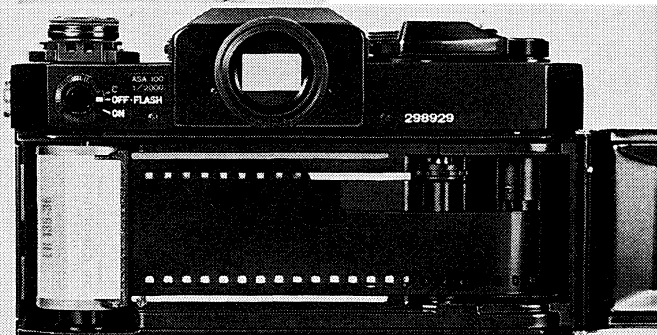
- ・ レンズの取扱い..... 58
 レンズの交換 レンズ信号 距離目盛 赤外マ
 ーク フィルム位置マーク FDレンズマウント(FL
 レンズとRレンズ) 被写界深度目盛 被写界深度
 の性質
- ・ ミラーのはね上げロック..... 64
- ・ 多重露出..... 66
- ・ キヤノンフィルターのおすすめ..... 67
- ・ 底蓋 裏蓋 ストラップの扱い..... 68
- ・ カメラの保管と手入れ..... 71

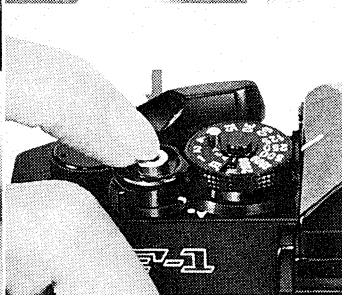
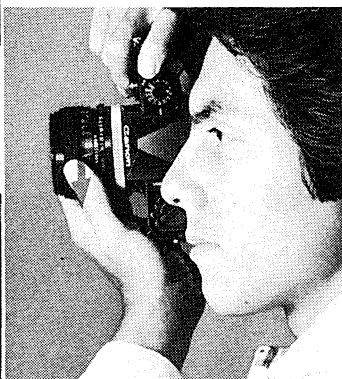
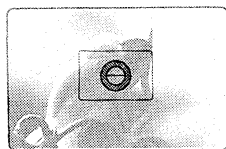
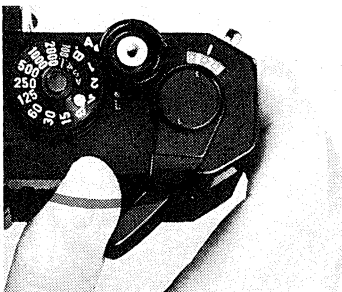
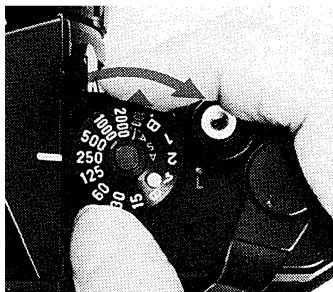


- | | | |
|---|-------------------|-----|
| 1 | レンズを取付ける | 16頁 |
| 2 | フィルムをつめる | 48頁 |
| 3 | 感度を合わせる | 32頁 |
| 4 | レバーを巻上げる | 23頁 |
| 5 | キャップをはずす | 15頁 |
| 6 | ファインダーを覗く | |
| 7 | ピントを合わせる | 30頁 |
| 8 | メーターで露出をきめる | 32頁 |
| 9 | 構図をきめてシャッターボタンを押す | |



$\frac{1}{2}$





3	4
5	6
8	7
	9

レンズの 扱い

レンズキャップ

レンズキャップは両端の爪をはさんで着脱します。レンズキャップはフィルター取付けねじを利用して取付けますので、両面にねじを持つフィルターは、その上からかぶせることができます。

レンズダストキャップ

ダストキャップは反時計方向に回すと外れます。逆にダストキャップを取付けるときは、レンズ後部の赤点上の位置決めピンとキャップの取付溝（キャップ上の▲印）を合わせ、時計方向に回します。
※このレンズには、ローレット（刻み）のついたダストキャップを使用してください。尚、ダストキャップを外すと絞りが途中まで閉じた状態になります。

（縮付けリングを持つレンズのダストキャップ）

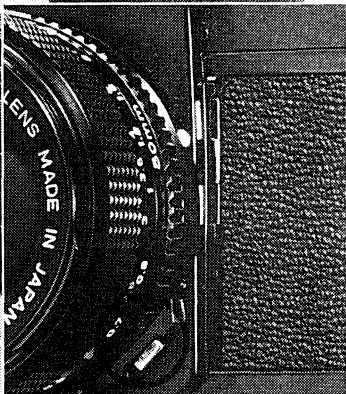
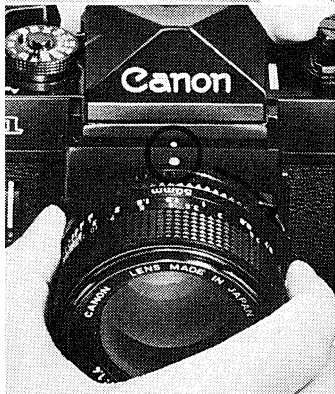
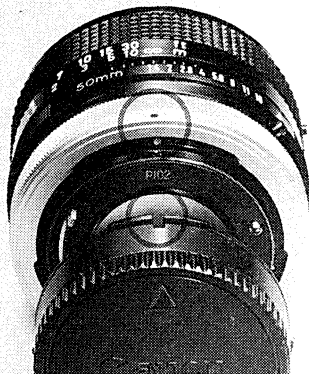
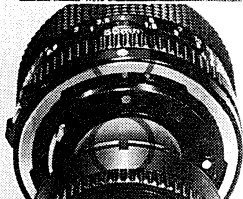
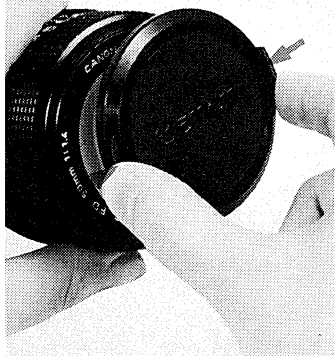
縮付けリングを持つレンズのダストキャップを外すときは、縮付けリングを矢印方向に回してください。取付けるときは逆の要領で行ないますが、縮付けリングの赤点下にある位置決めピンと、底蓋の位置決め溝を合わせて、押付け気味にしなから縮付けリングを回します。尚、ダストキャップを外すと縮付けリングは回せません。

レンズの着脱

ボディのキャップを反時計方向に回して外し、レンズを取付けてください。

取付け方

カメラの赤点とレンズの赤指標（赤突起）を合わせ、レンズ全体を時計方向に回します。完全に取付くとカチッと音と同時に、レンズ取外しボタンが飛出します。レンズを外すときは、レンズ取外しボタンを押しながら、レンズを反時計方向に回し、手前に引きます。
※レンズの装着確認は、レンズ取外しボタンの飛出しで行なってください。従って、取付けの際はレンズ取外しボタンを押さえたままで行なわないでください。



レンズ交換のしにくい暗い場所では、レンズの赤指標(赤突起)をおおよそ合わせて、取付けることができます。尚、暗い場所での取付け確認は、カチッという取付け音で行なってください。

※キヤノンベリックス及び自動絞りが連動するエクステンションチューブ類は、赤指標を確実に合わせて取付けてください。

(縮付けリングを持つレンズの取付け方)

縮付けリングを持つFDレンズを取付けるときは、ボディの赤点と縮付けリングの赤点を合わせ、押付け気味にしながらか縮付けリングを時計方向に一杯に回します。

外すときは赤点が真上にくるまで逆に回します。

※FDレンズはフィルム巻上げの途中で取付けないでください。

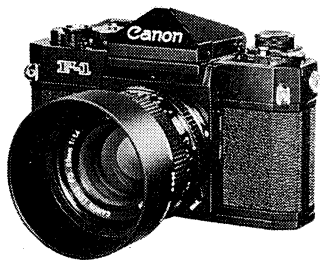
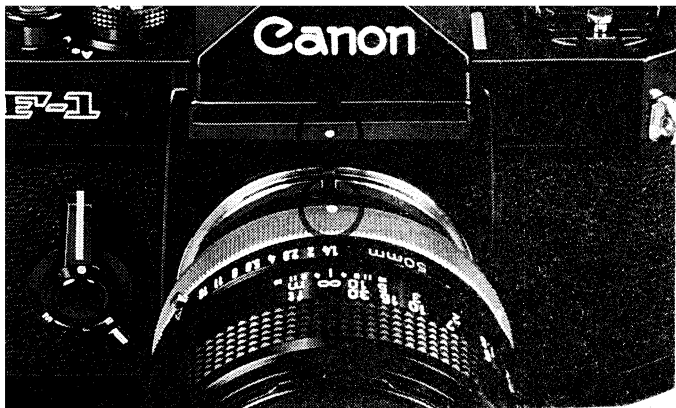
※絞込み測光レバーを倒した状態でレンズを取付けないでください。

フード

フードは別売りですが、有害光線をカットしますので、必要に応じて使用してください。フードの取付けは、レンズ先端のフード取付けバヨネットに、はめ込んで回すだけです。

外すときは、逆に回します。尚、フードはギャゼットバックなどへの収納を考慮して、逆向きにかぶせてキャップをすることができるようになっています。

広角専用フードの中には、フードの取付け位置が決まっているものがあります。その場合はフード取付けバヨネットの中央切欠き溝と、フードの丸印を合わせてはめ込み、回します。



水銀電池の つめ方

別封の水銀電池をカメラ底部の水銀電池室につめてください。

水銀電池は内蔵メーターの電源ですから、入れ忘れるとメーターが作動しません。

- 1 水銀電池室蓋のコイン溝を硬貨で左回ししてはずし、
- 2 水銀電池の中心接点のある方(⊖)を奥に向けて挿入し、蓋をねじ込みます。逆に入れますとねじ込めません。

●水銀電池はJIS(日本工業規格)M-R9型(H-D)型1.35V 1コ使用。米国製MALLORY・PX-625, EVEREADY・EPX-625に相当し、約1カ年の使用に耐えます。

●汗や指紋を拭き取ってください。水銀電池に汗や指紋をつけたまま挿入しますと、接触不良になりメーターが作動しないことがあります。また、腐蝕してカメラの電気接点をそこなうおそれがあります。十分ご注意ください。

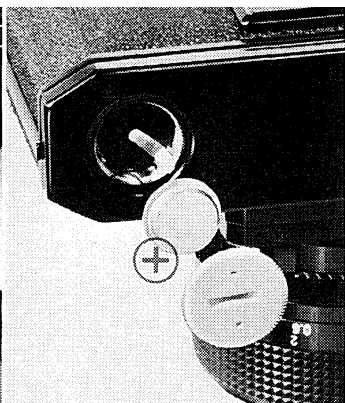
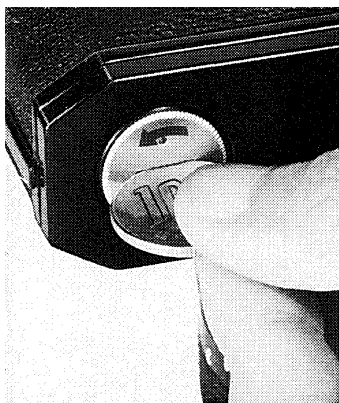
●カメラの不使用時には水銀電池は抜き出しておいてください。

水銀電池のチェック

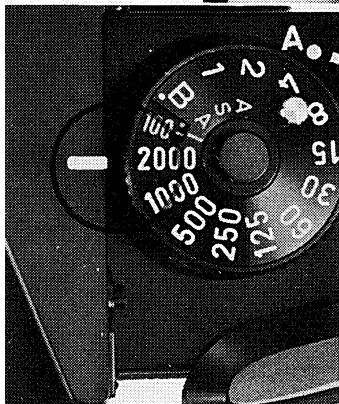
水銀電池を挿入したときには、必ず電圧をチェックしてください。また長期間使用しなかった電池も確かめ、電圧不十分の場合は交換してください。

- 1 シャッターダイヤルの感度目盛をASA100にセットし、シャッタースピードを2000に合わせます。
感度の合わせ方は、シャッターダイヤル周辺のリングを持上げて回します(32頁参照)。
- 2 ●これ以外の目盛では正しいチェックができません。
- 3 巻戻し部背面のメータースイッチをCに回します。
このときファインダー内のメーター指針が定点指標内に振れれば電圧は十分です。指針が定点まで振れない場合は電圧不十分ですから新しい電池と交換してください。
- 4 カメラを使用するときには、メータースイッチをONにセットしてください。

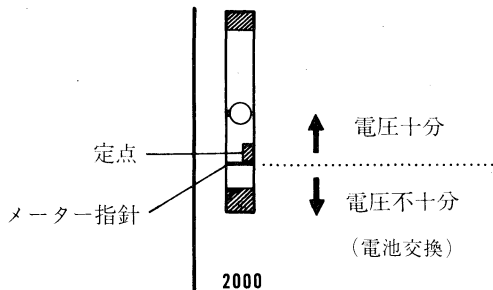
新しい水銀電池をお求めの際には、使用済みの水銀電池と引き換えのうえ、お求めください。特殊条件下では有害化することがあるため絶対に捨てないようお願いいたします。



1 | 2



1 | 2



フィルムの 巻上げ操作

- ### 巻上げとシャッターボタン
- 1 巻上げレバーは、シャッターとフィルムの巻上げおよび絞りとミラーの作動チャージなど、内部機構の巻上げを一度に行なうものです。
 - 2 巻上げの前にシャッターボタンの安全ロックを回し、指標をA位置に合わせてください。
 - 3 巻上げレバーを完全に止まるまで回すとフィルムが1コマ分送られて、シャッターがチャージされます。同時にフィルムカウンターも1目盛進みます。
 - 4 シャッターボタンを押すと、ミラーがはね上がり、同時にプリセット位置までレンズが絞られ、シャッターが作動します。作動後は、ミラー、絞りとも元に戻ります。
 - 5 巻上げレバーは、シャッターの作動後、直ちに巻上げできる状態になります。
 - 6 巻上げが完全でないと、シャッターボタンを押しても、シャッターが作動しません。その場合には、もう一度巻上げを確かめてください。
 - 7 巻上げは、レバーを小刻みに繰返し操作してもできます。

撮影枚数表示

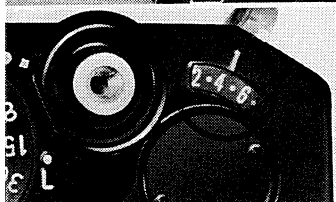
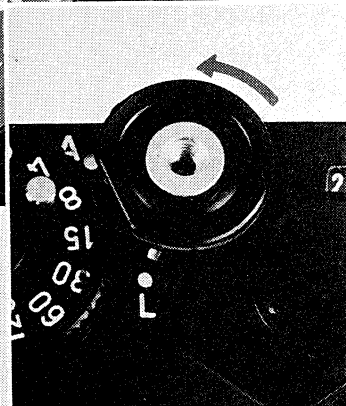
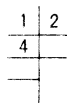
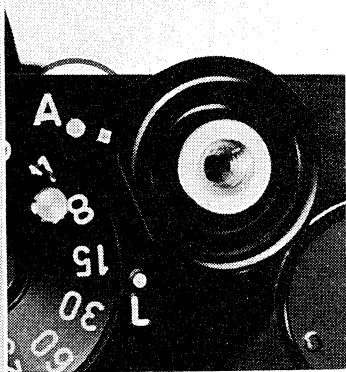
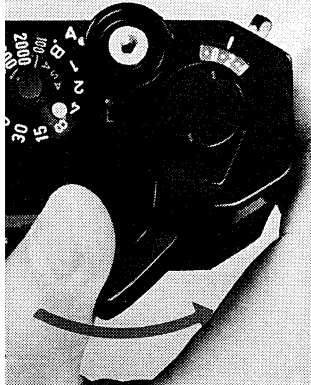
レバーを1回巻上げるごとにフィルムカウンター目盛が1目盛進み、フィルムの撮影枚数を知らせます。目盛は裏蓋を開くと自動的にスタートマーク(S)まで戻ります。

シャッターの安全装置

シャッターボタンの安全ロックを回し、指標をLの位置に合わせると、巻上げ後シャッターボタンが動かぬように固定されます。巻上げたままの携行またはバッグ内に収納するときご利用ください。

ケーブルリリースの取付け

シャッターボタンには、ケーブルリリースをねじ込んで取付けできます。ケーブルリリースは長時間露出や、望遠撮影で、三脚にカメラを取付けた場合にご利用ください。また複写などのさいにも大変役立ちます。ケーブルリリースを使用する場合には、安全ロックレバーがL位置にあってもシャッターが作動し、巻上げもできます。



シャッター と絞り

シャッターと絞りの調節

シャッターを開いてフィルムに光を与えることを露出または露光といいます。シャッターと絞りは、この露出の調節をするもので、シャッターは時間の調節を行ない、絞りは光の量を調節します。

キヤノンF-1では追針式TTLメーターを内蔵しており、開放測光により、簡単に適正露出が得られるようになっています。

シャッターダイヤル

シャッタースピードを調節するもので、各目盛には各秒時の分母が表示されています。たとえば1000は1/1000秒、2は1/2秒です。これを回して必要な目盛を指標に合わせると、シャッターボタンを押したときに目的の露出時間が得られます。ただし2000とB目盛の間は回転できない構造になっています。シャッタースピードは、1段ごとに速度が2倍になる倍数系列となっています。

●Bはバルブ露出で、シャッターボタンを押している間シャッターが開いていますから、1秒以上の長時間露出に用います。

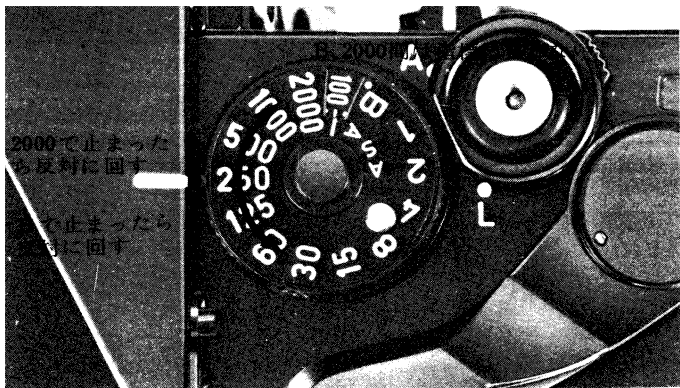
●長時間のT(タイム)露出が必要なときには、Bにセットし、シャッターボタンを押したままシャッターの安全ロックを回して、指標をLに合わせてください。こうすると、指を離しても露出が続けられ、レバーをAに戻すとシャッターが閉じて露出が終了します。

●T露出はロック付きケーブルリリースを利用することによってもできます。

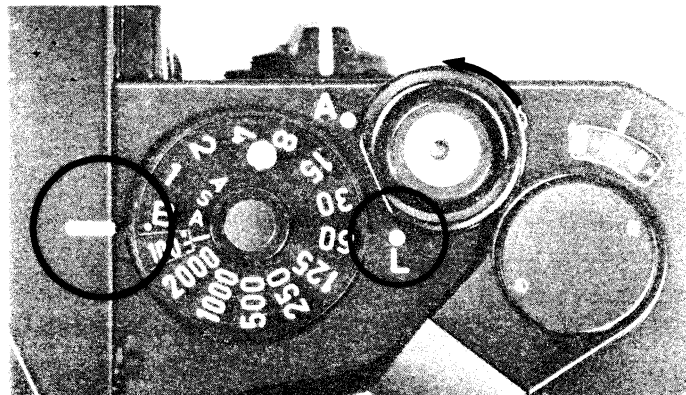
●ブースターTファインダーを取付けると、TTL測光で長時間露出がきめられ、タイマーによって自動露出ができます。

●60目盛はストロボの同調用です。シャッタースピードとしては1/60秒ですが、ストロボ使用時には実際には、ストロボの閃光時間だけのごく短い露出に相当します。

●各目盛のセットは、カチッと止まるクリックストップの位置で行なってください。とくにB目盛の場合は下の白点を合わせてください。



T 露出（長時間露出） シャッターボタンを押したまま回す



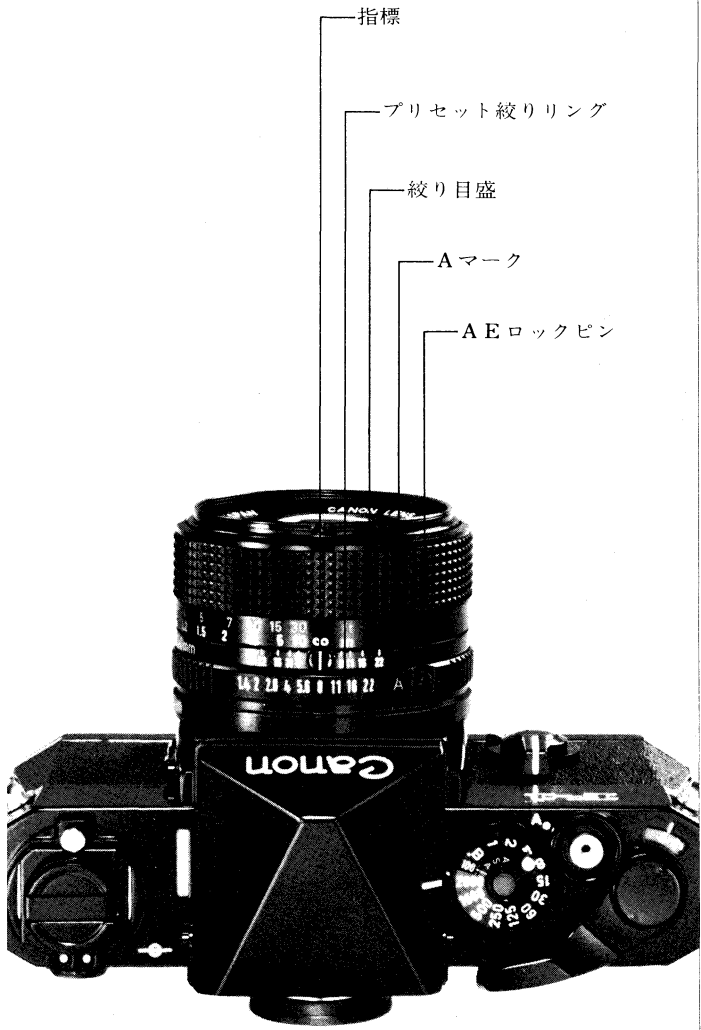
レンズの絞り

絞りはシャッタースピードと組合わせて適正露出を行なうために用いられます。プリセット絞りリングを回して調節し、指標に合った目盛で明るさを読取ります。レンズの明るさ(開放公称値)は、この絞りの一番小さい数値の目盛をとって呼ばれており、目盛はその数値が大きくなるにつれて暗くなり、目盛の1段ごとに明るさが半分になるようになっていきます。したがって適正露出がきまっている場合、絞りを1目盛絞込んだときはシャッター速度を1段おそくし、2目盛絞込んだときはシャッター速度を2段おそくしてやれば、露光量は同じことになります。絞りは目盛の間を用いることもできますから、キャノンFDレンズでは絞りリングの目盛の間つまり半絞り位置にもクリックストップを設けて使い易くしてあります。

●レンズによっては、最大口径の絞りとの間にだけ明るさが半分にならないものもあります。絞り目盛と露光量の比率はF2を規準として次の通りです。

絞り値	1.2	1.4	1.8	2.8	3.5	4	5.6	8	11	16	22	32
露光比	3	2	1・1/4	1/2	1/3	1/4	1/8	1/16	1/32	1/64	1/128	1/256

絞りのきめ方はTTLメーターにより簡単に行なえます。絞りは明るさの制限だけでなく、ピントにも関係しますから、効果を十分に理解してご利用ください(62頁参照)。



指標

プリセット絞りリング

絞り目盛

Aマーク

AEロックピン

自動絞り

キヤノンFDレンズはプリセット絞りリングを回しても、つねに開放でファインダー視野が見られ、シャッターを切った瞬間だけプリセット絞りリング上にセットしてある絞り値まで、絞り羽根が絞込まれます。そしてシャッター作動後は、再び全開して明るいファインダーに戻る自動絞りとなっています。

FDレンズの手動絞りロック

レンズとボディの間に絞り連動ピンのない、中間チューブなどをはさんで撮影する場合は、手動絞りになりますので次のようにしてください。

操作(1)

レンズ後部の自動絞りレバーに、絞りレバーストッパーを取付け固定します。この状態でエクステンションチューブM等に取り付けられれば、絞りが開閉します。絞りレバーストッパーは別売です。マクロフォトカプラーにレンズを取付け使用するときには、レンズ後部にダストキャップを取付ける要領でマクロフードを取付けます。この状態で絞りリングを回せば、絞りが開閉します。

※絞りレバーストッパーを取付けたレンズをカメラ、オートベローズ、ベローズFL等の自動絞り連動機構を持つものに、直接取付けしないでください。

操作(2)

マクロレンズ及び縮付けリングを持つFDレンズは、自動絞りレバーを反時計方向に一杯に押付けると、自動絞りレバーが固定されます。この状態でエクステンションチューブM等に取り付け、絞りリングを回せば絞りが開閉します。マクロフォトカプラーにレンズを取付け使用するときには、さらにマクロフードを併用します。

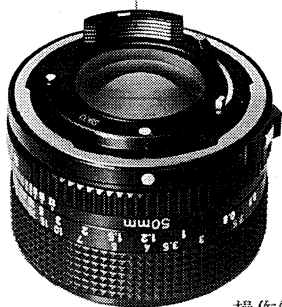
操作(3)

縮付けリングを持つFDレンズの中でも、手動絞りロックレバーを持つレンズの場合は、最初に自動絞りレバーを反時計方向に押付け、ロックレバーを(L)位置へ動かして自動絞りレバーを固定します。

この状態でエクステンションチューブ等に取り付け、絞りリングを回せば絞りが開閉します。マクロフォトカプラーにレンズを取付けて使用するときには、さらに付属のマクロフードを併用します。

手動ロックの解除は、ロックレバーを自動側へ戻すだけです。

絞りレバーストッパー



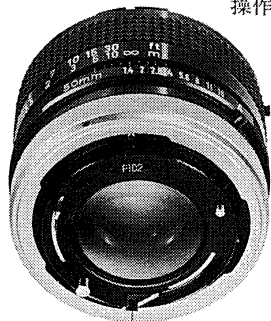
操作(1)

マクロフード

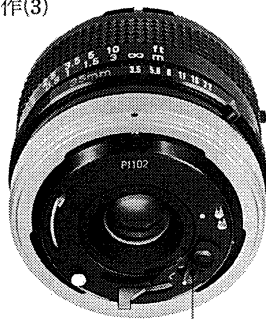


操作(2)

操作(3)



自動絞りレバー



手動ロックレバー

ピントの 調節

ファインダーを覗きながら、レンズのフォーカシングリングを回し、ファインダー中央の円形内で合わせます。中央はスプリットイメージ、外はマイクロプリズムになっています。

スプリットイメージプリズムは、上下に分割された像が一致すればピントの合った状態で、像が左右にずれている場合はピントがはずれています。外側のマイクロプリズムでは像がもっともはっきり見える状態がピントの合ったときです。

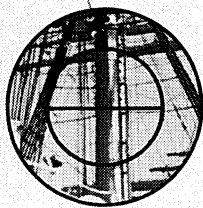
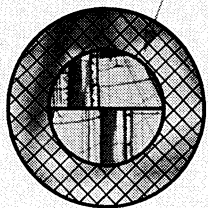
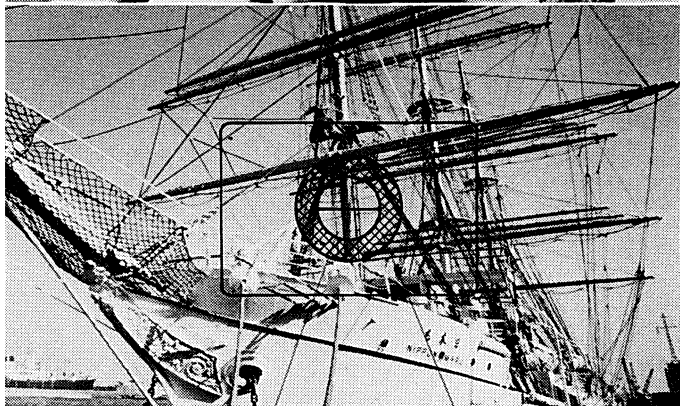
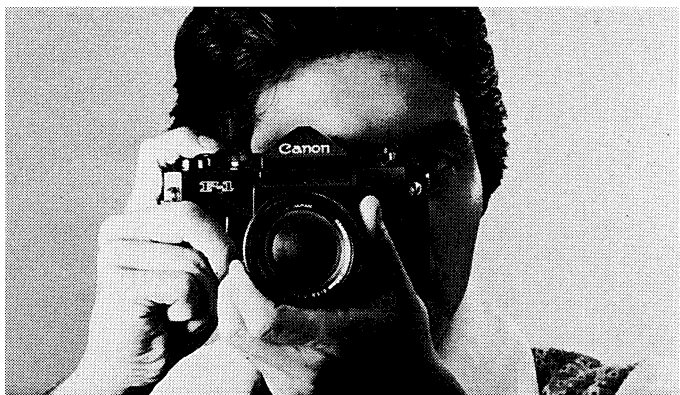
ピントが合っていないときは、像は崩れてギザギザした感じに見えます。

またピント合わせは、周囲のマット面でもできます。

●光線の状態によっては、ファインダー下方に左右に走る円弧状の輝線が見えることがあります。これはミラーコンデンサーの接合面によるもので、撮影にはなんら支障はありません。むしろキヤノンF-1のすぐれた測光方式によるものとご理解ください。

●キヤノンFD55mm F1.2レンズを装着して三脚へ取付ける場合、そのままでは、フォーカシングがしにくいいため、カメラホルダーF3をご利用ください。

●キヤノンF-1ではファインダーおよびフォーカシングスクリーンが交換できます(42頁参照)。



ヒントがはずれている

ヒントが合っている

露出の きめ方

TTLメーターの使い方

キヤノンF-1は、FDレンズとの組合わせでシャッタースピード、フィルム感度および絞りリングに連動する追針式のTTL開放測光機構をもっており、ピントグラス上のコンデンサーレンズ中央部の光束を測るため、きわめて正確な露出決定ができます。なお、レンズの開放F値補正を自動的に行なう機構を組込んであるため、どの明るさのキヤノンFDレンズを使用しても操作は変わりません。

また、キヤノンF-1にFLレンズを取付けた場合には、キヤノンFT同様、絞込み測光が可能です。

露出のきめ方にはシャッターを先に選ぶ場合と、絞りを先に選ぶ場合の2通りありますが、いずれにも慣れることが、よい写真を写すために必要なことです。

フィルム感度

フィルム感度のセット

使用フィルムのASA感度をASA感度表示窓に出します。それにはシャッターダイヤル周囲のフィルム感度セットリングをつまみ、持上げてから回します。フィルムがSS級ならASA感度表示窓に100を出し、リングを落し込んでセットします。

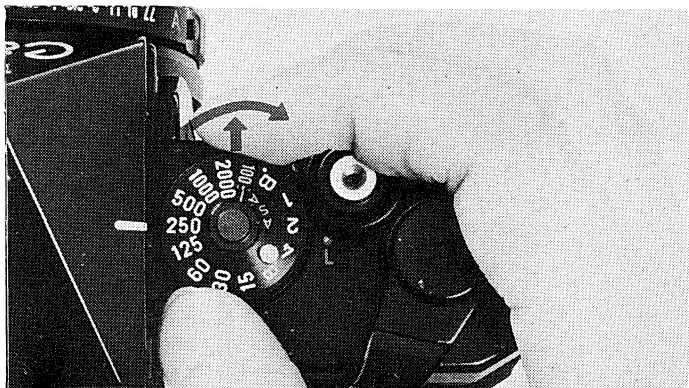
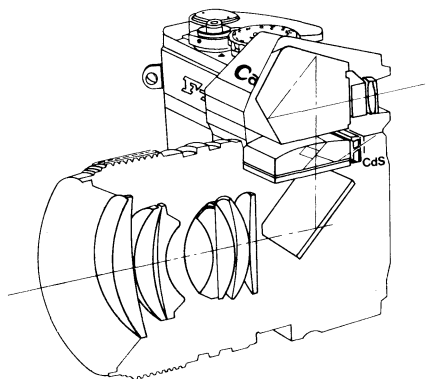
●感度セットは、ASA感度表示窓にASA25が出たときは、それ以上左へ回せません。逆に3200が出たときは右へ回せません。

●使用できるフィルム感度

(32)	(40)	(64)	(80)	(125)	(160)	(250)	(320)	(500)	(640)	(1000)	(1250)	(2000)	(2500)								
ASA 25	• 50	• 100	• 200	• 400	• 800	• 1600	• 3200														
(DIN) 15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36

上記カッコ内の数字は中間の点に相当する感度です。

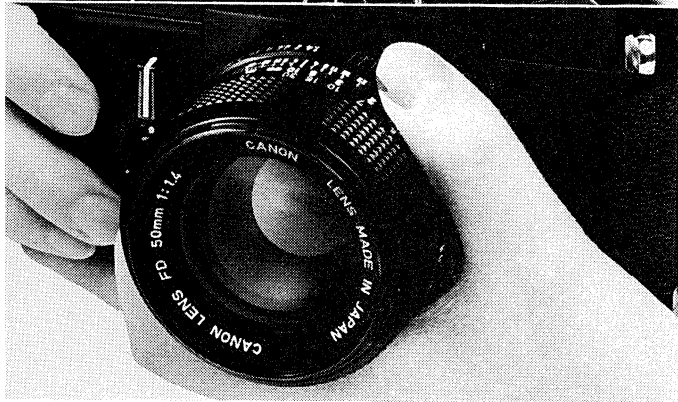
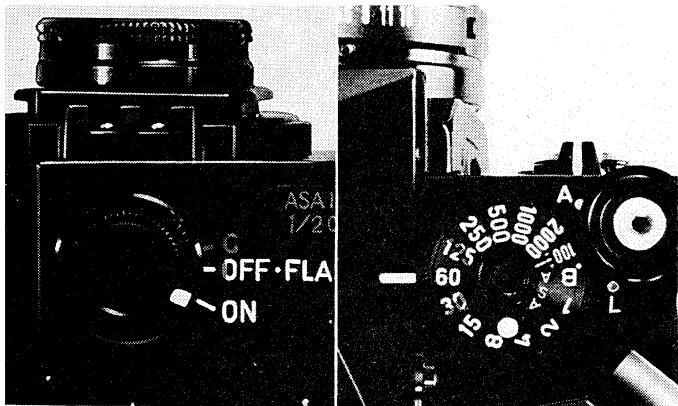
●フィルムの感度は光に感ずる速さで、フィルムの外装箱か説明書に明示されています。



開放測光

開放測光機構のあるキヤノンFDレンズを取付けた場合、開放測光ができます。開放測光とは、プリセット絞りリングをセットするだけで測光する方法です。この場合、絞り羽根が開いたままですから、ファインダーは暗くなりません。

- 1 メータースイッチをONにします。
- 2 シャッタースピードをきめます。室内は30~60、曇天戸外125、晴天250以上(ASA100)が適当です。
- 3 ファインダーを覗き、カメラを被写体に向けピントを合わせます。
- 4 ファインダー中央長方形部が測光する範囲です。この部分がメーター受光部と同一面積になっており、この範囲に被写体の中心となる部分を入れて測る方式です。したがって従来のメーターでは困難な逆光時の露出決定も容易で、撮影者の意図を盛込んだ露出がきめられます。
- 5 右側のメーター情報窓の指針を確かめます。プリセット絞りリングを回して、メーター指針に追針を重ね合わせます。これで適正露出にセットされます。
●メーター窓には指針が2つあり、メーター指針はASA感度とシャッタースピードに連動し、また被写体の明るさに応じて上下します。
丸の追針は、キヤノンFDレンズのプリセット絞りリングに連動します。したがって、シャッタースピードを先にきめた場合には、プリセット絞りリングを回してメーター指針に追針の丸を重ね合わせると適正露出にセットされます。
- 6 逆に絞り値を先にきめた場合には、シャッターダイヤルを回して追針の丸にメーター指針を重ねます。
●追針の丸は中央が適正露出で、直径はほぼ1絞りになっています。
- 7 ●プリセット絞りリングを回してもメーター指針と追針の丸が重ならないときは、シャッタースピードが適切でない場合です。シャッターダイヤルを回して重ねてください。
- 8 追針のメーター情報窓での移動範囲は、使用レンズの開放Fナンバーによって変わり、メーター情報窓の上下一杯に動くとは限りません。追切れない場合は、シャッター



$$\frac{1}{2}$$

$$5$$

スピードを変えてください。メーター指針が上に振り切れている場合はシャッタースピードを速くし、メーター指針が下に振り切れている場合は、シャッタースピードを遅くしてください。

●開放F値がF 2.8またはそれ以上の明るいレンズの場合(例えばFD100mm F 2等), F 32は追針が警告マーク内に入り測光できません。

但し、F 22以上の絞り値で測光し、その分シャッタースピードで補正すれば、F 32が使用できます。

- 9 シャッタースピードを高速側にセットするとメーター指針が下へ移動し、遅くすると上へ移動します。シャッタースピードがメーター連動範囲外のスロースピード(ASA 100の場合 $\frac{1}{2}$ 秒以下)にセットされると、指針が適正範囲外に逃げメーター情報窓全体が赤くなって警告します。この条件下では絞りを変えても測光ができません。フラッシュ撮影に切換えるか、高感度フィルムの使用、またはブースターで測光することになります。

●シャッタースピードを連動範囲内の高速側に戻すと情報窓は白に戻ります。

- 10 メーターを使用しないときには、水銀電池の消耗を防ぐためスイッチをOFF・FLASHにしてください。万一切り忘れても電流消費量はわずかです。

●Bは1秒以上の長時間露出用ですから、カメラ内の露出計では測光できません。

●逆光時には必ずレンズフードをご使用ください。

●メーター使用中、明るさの変化によって針の動きが鈍る場合もありますが、これはCdSの特性によるものです。

メーター
連動範囲
ASA

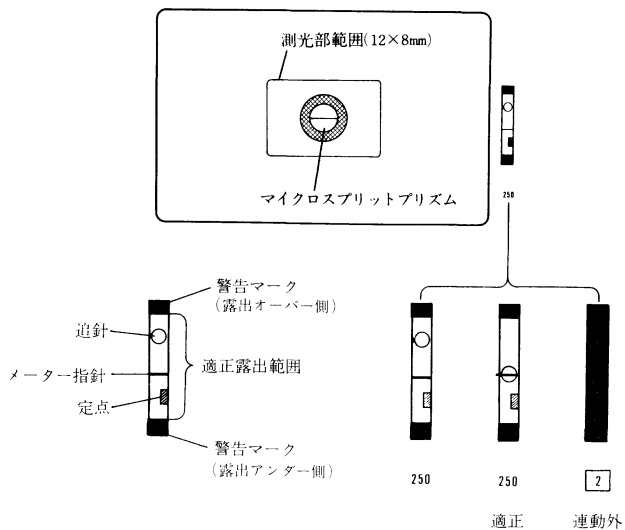
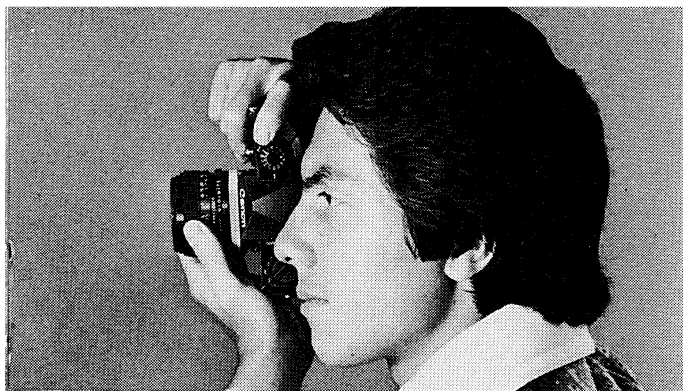
使用できるシャッタースピード

25	1	2	4	8	15	30	60	125	250	500	1000	2000
50	2	4	8	15	30	60	125	250	500	1000	2000	
100	4	8	15	30	60	125	250	500	1000	2000		
200	8	15	30	60	125	250	500	1000	2000			
400	15	30	60	125	250	500	1000	2000				
800	30	60	125	250	500	1000	2000					
1600	60	125	250	500	1000	2000						
3200	125	250	500	1000	2000							

32 32 32 32 32 32 32 22 16 11 8 5.6
← 使用できる最小絞り →

①読み方はASA100のフィルムを使用した場合ASA100の欄を横に見ます。シャッタースピードは1/4から1/2000までメーターに連動することがわかります。

②各シャッタースピードに対する絞りは、開放絞り値から上表下段に記載されている最小絞り値まで、連動して



使用できます。

●メーター情報接光窓が暗い場所では、アクセサリーのイルミネーターFまたはフラッシュカプラーLでメーター情報接光窓を照明してください。

絞込み測光

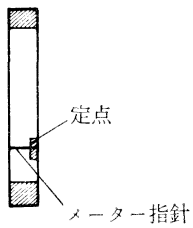
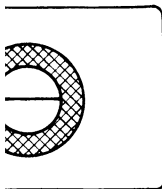
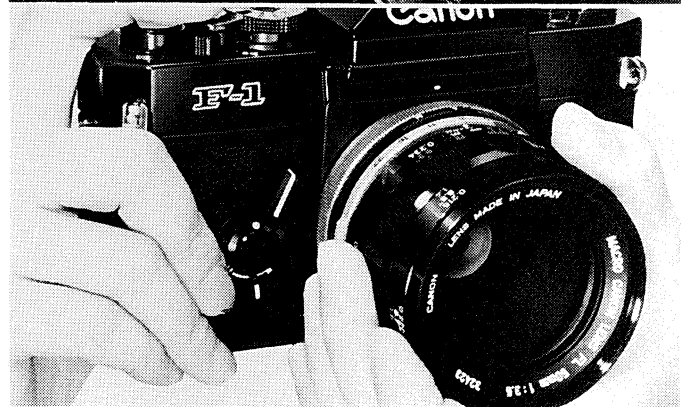
開放測光機構のないキヤノンFLレンズを取付けた場合には絞込み測光を用います。絞込み測光とは絞り羽根を実際に絞込んだ状態、つまり撮影時同様の光線状態で測光する方法です。

絞込み測光

- 1 シャッタースピードをセットします。
- 2 カメラを被写体に向けてファインダーを覗き、ピントを合わせます。
- 3 絞込み測光レバーを倒して絞込みます。この場合追針は下の警報マーク側に逃げメーター指針のみ残ります。
 - 測光レバーはストップするまで十分に押してください。
- 4 そのままプリセット絞りリングを回して、ファインダー内の定点にメーター指針を入れると、絞りは適正露出にセットされます。
 - 定点は中央が適正露出です。定点の幅は1絞りの範囲になっています。
- 5 絞りを先にきめた場合には、シャッターダイヤルを回して調節します。その場合、シャッターダイヤルのクリックストップに必ず入れてください。

絞込み測光レバーとそのロック

レバーを倒すとプリセット位置まで絞りが閉じ、レバーから手を離すとレバーが戻り、絞りも開放に戻ります。ロックレバーをL位置にしておくと、レバーを倒したさい絞りが手動にロックされ、絞込み測光レバーから手を離しても、絞り羽根が戻りませんから操作が楽になります。また測光レバーをロックしたままシャッターを切ることもできますから、測光後も開放に戻さず、そのままシャッターを切ってください。ピントも確かめられその上ショックが少なく速写性も増します。ロックレバーを元の位置に戻せば絞込みは解除されます。



- メーター指針が定点より上方にあり、絞りを絞っても定点と合わない場合には、シャッタースピードを速くしてください。
- メーター指針が定点より下方にあり、絞りを開いても定点と合わない場合には、シャッタースピードを遅くします。
- メーター情報窓が赤変したらメーター連動範囲外ですから、フラッシュを使用するか三脚を使用してください。三脚撮影の際の露出はブースターで決めてください。
FDレンズとF-1の組み合わせでは、開放測光で正しい露出が得られます。
FLレンズとF-1の組み合わせでは、絞込み測光で正しい露出が得られます。
FDレンズには、開放F値補正信号があり、絞り開放のときに正確な露出を与えるようメーターを補正してあるため、原則として開放測光をおすすめします。
- 広い室内や舞台撮影のように手元に照明がとれない場合には、ファインダー内メーター情報が見にくくなりますから、イルミネーターFのご使用をおすすめします。



ファインダー の交換

ペンタプリズムは取りはずして他のファインダーとの交換使用が可能です。はずし方は、ペンタ部側面にある2つの着脱ボタンを押して後方へ引抜きます。

取付けは、ファインダーの取付けレールが平らに入るよう後方からすべり込ませ、止まるまで押付けます。パチンと音がしてロックされます。

交換ファインダーには、ブースターTファインダー、サーボEEファインダー、スピードファインダー、ウエストレベルファインダー等があります。

フォーカシングスクリーンの交換

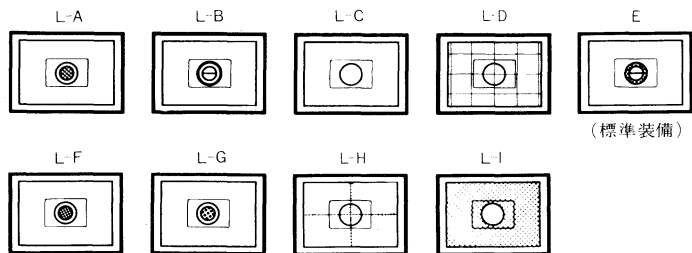
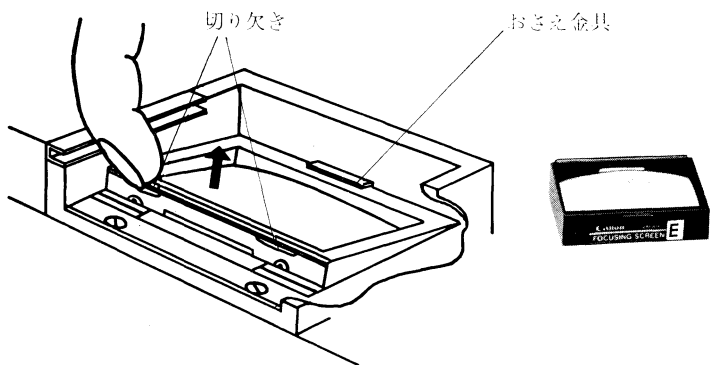
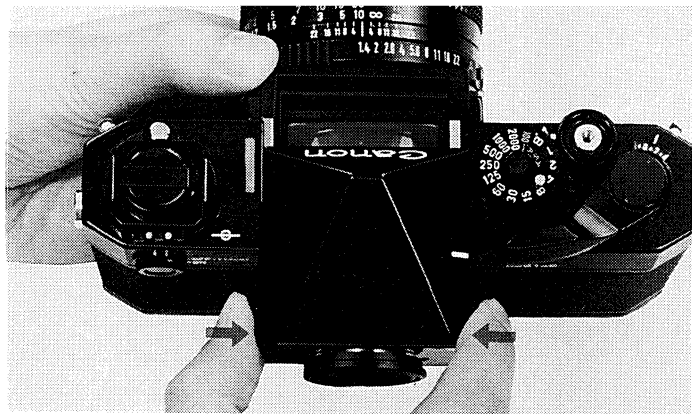
ファインダーボックス内にあるフォーカシングスクリーンも交換可能です。標準はマイクロスプリットプリズム距離計付きですが、他にL-Aマイクロプリズム式、L-Bスプリットイメージ式、L-C全面マット式、L-D方眼マット式、L-Fマイクロプリズム式大口径用、L-Gマイクロプリズム式小口径用、L-H目盛線入りマット式、L-I十字線入りマット式の8種が用意されており、好みや用途によって使いわけできます。

交換のしかた

ファインダー室内のフォーカシングスクリーン後方にある2カ所の切り欠きに爪先を入れ、上方に持上げると簡単に浮上がりますから、金具の端をつまんで取出します。入れるときは突起をレンズ側に向け、ミラーボックス内のおさえ金具の下にさし込んでから後部を押下げ、平らに落とし込みます。

●フィルムが入っている場合、ファインダー類の交換は直射光下を避け、素早く行なってください。

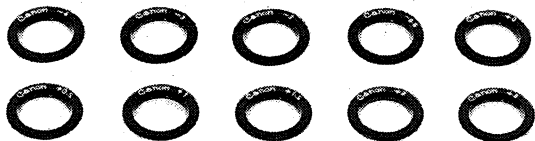
●フォーカシングスクリーンのレンズ部には手を触れないでください。ほこりが付いた場合は、ゴム球付きのブロワーで吹飛ばすか、柔らかい刷毛で軽く払うようにしてください。



●視度補正レンズは10種用意されています。交換すれば近視や遠視眼の方も眼鏡なしで鮮明な被写体を見ることができます。

はずし方はリングを左回しに回します。

種類 +3 +2 +1.5 +1 +0.5 0 -0.5 -2 -3 -4 ジオプター
遠視は(+), 近視は(-)です。



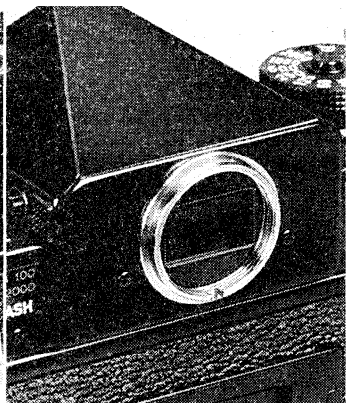
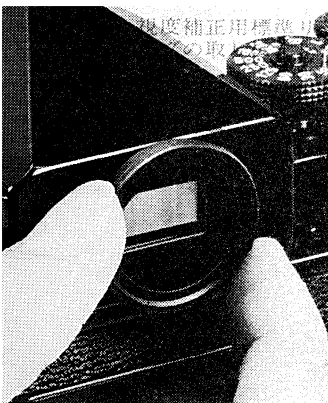
●ピントを拡大観察できるマグニファイヤーRが視度補正レンズのリングによって取付けできます。

マグニファイヤーRは、ファインダー接眼部に取付けたまま上方にはね上げると直ちに全視野が観察できます。マグニファイヤーRを取付けるときはラバーアイピースリングをはずして取付けてください。

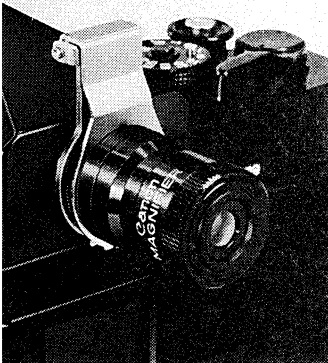
●接眼部にはアングルファインダーA2または、Bが取付けられますが、A2では左右逆像Bではプリズムにより正像に見えます。

複写、拡大、顕微鏡写真撮影などに用いると便利です。

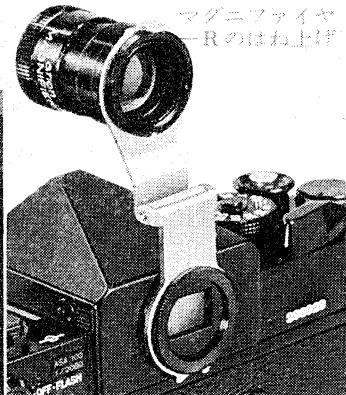
●接眼部にはラバーアイピースリングがかぶせてあります。したがってアングルファインダーやマグニファイヤーを取付ける場合は接眼部のラバーアイピースリングをはずして使用します。



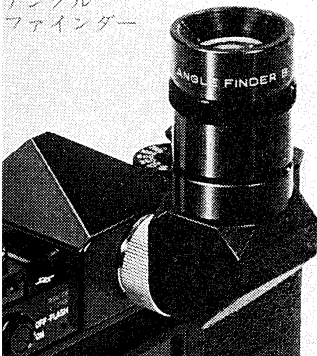
マグニファイヤーR



マグニファイヤーRのはね上げ



アングル
ファインダー



カメラの 構え方

撮影のとき、カメラを確実に構えることは、鮮鋭なピントの写真をとるために最も大切です。カメラは縦位置または横位置の状況に従って写真のように持ち、ファインダーを覗いて構図の決定をすると同時にピント合わせをし、それから静かにシャッターを切ります。そのさい、特に次のことが大切です。

- 1 両手は努めて深くカメラを握り込むこと。
- 2 カメラを頬あるいは額に当てて固定すること。
- 3 横位置のときは両ひじ、縦位置のときは少くとも一方のひじをピッタリと体に付けること。

●シャッターボタンを乱暴に押すことはカメラブレの原因になります。

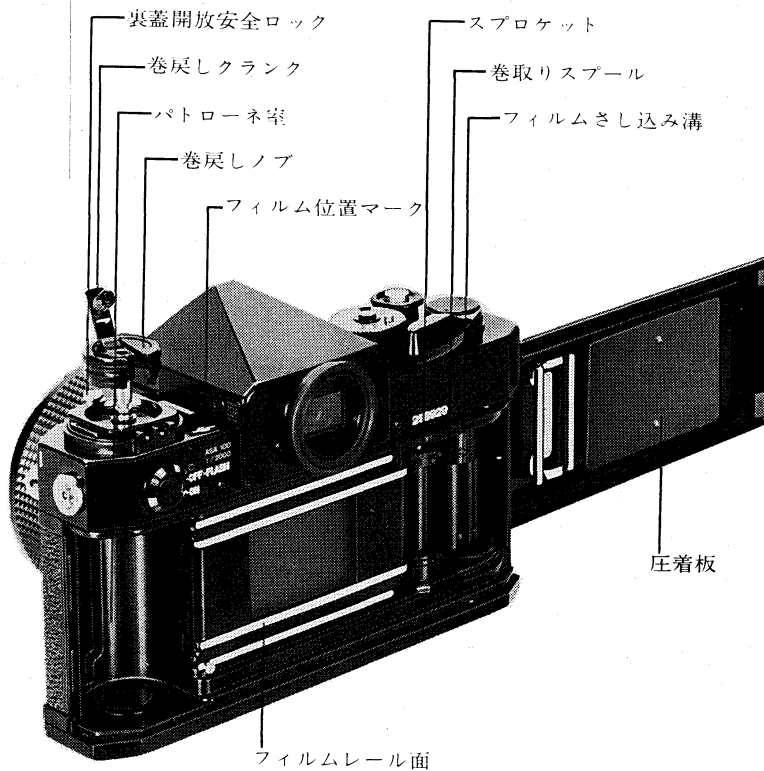
●撮影には三脚とレリーズを使う方が確実です。特に望遠レンズやスローシャッターを使用するときは、絶対必要です。

●三脚使用のためのカメラホルダー F3およびキヤノンレリーズが用意されています。ご利用ください。

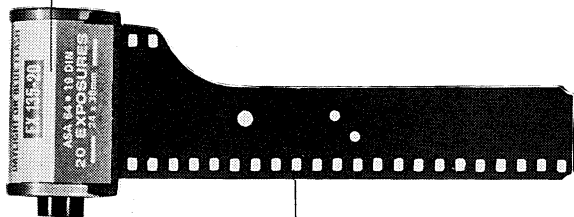


フィルムの つめ方

使用フィルムは、市販の日中装填用パトローネ入り35mmフィルムです。装填のさいは直射光下を避けてお取扱いください。



パトローネ



パーフォレーション

裏蓋の開き方

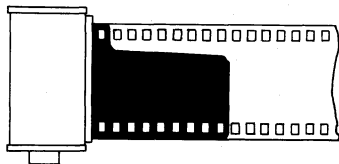
裏蓋開放安全ロックを押しながら、巻戻しノブを引出すと裏蓋が浮上がります。写真のように巻戻しクランクを持上げて行なうと操作が容易です。



フィルムの装填

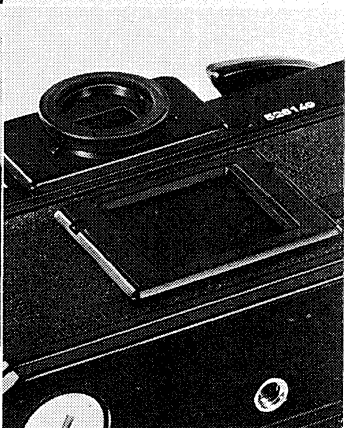
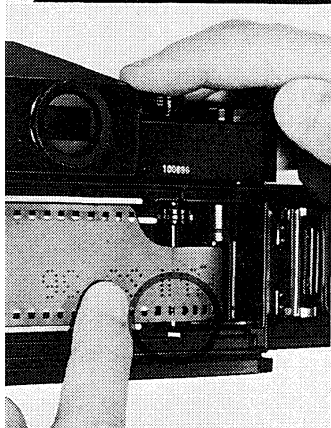
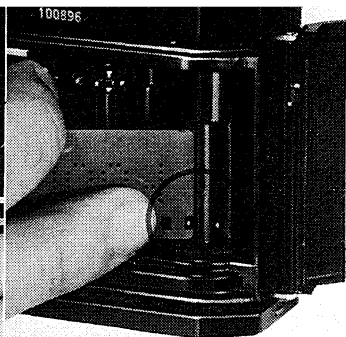
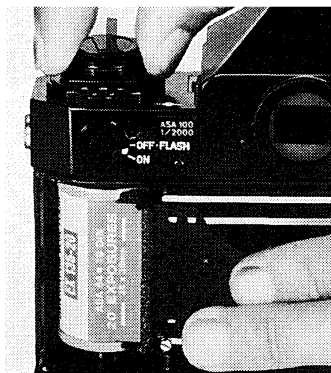
- 1 裏蓋を開いたのち、巻戻しノブを押上げた状態でパトローネを入れ、巻戻しノブを押下げてパトローネ軸にさし込みます。
ノブが完全に戻り切れないときには、押し気味にしながら左右にわずかに回すとさし込めます。
- 2 フィルムを少し引出し、先端を巻取りスプールの溝にさし込みます。2孔分位が適当です。
- 3 巻上げレバーを回しフィルムを1回巻取ります。そのときスプールの突起にパーフォレーションがかかり、同時にフィルム送りのスプロケットの歯にパーフォレーションがかかっていなければなりません。
●フィルムをフィルム巻取りスプールの巻付けるときは、必ず巻上げレバーを使用してください。
- 4 フィルムにたるみがなく、パトローネが浮上らぬことを確かめて裏蓋を閉じます。
- 5 2回空写しします。
レンズキャップをかぶせたまま、巻上げてシャッターを切る操作を2回繰返してください（空写しといいます）。次の巻上げで、フィルムカウンターは、1枚目をあらわす(・)に進み撮影準備ができます。

●暗室装填用長巻きフィルムを使用するときは、リーダー部の先端を下図のように切断してください。



メモホルダーの利用

裏蓋についているメモホルダーに、フィルム包装箱のタイプ名の表示されている部分を切り取り差込んでご利用ください。また撮影地やデータなどのメモ入れとしてご利用ください。



1	2
3	

“正しいフィルム装填”の確認

巻上げをするたびに、巻戻しノブが反時計方向に回ればフィルムが正しく装填されている証拠です。もし回らなければ、フィルムにたるみがあるか、スプロケットにパーフォレーションがかかっている場合です。巻戻しノブを回してたるみをとっても、巻上げ時に巻戻しノブが回らない場合には、一旦フィルムを巻戻してから装填しなおしてください。

- フィルム装填が不確実で装填し直す場合、巻戻し過ぎてパトローネ内にフィルムを巻込んでしまうと、装填できなくなりますからご注意ください。

フィルムの感度表示

フィルムの装填をしたときは、忘れずにそのフィルム感度を、ASA感度表示窓に表示しておきます。セットのしかたは32頁のフィルム感度の合わせ方をご覧ください。

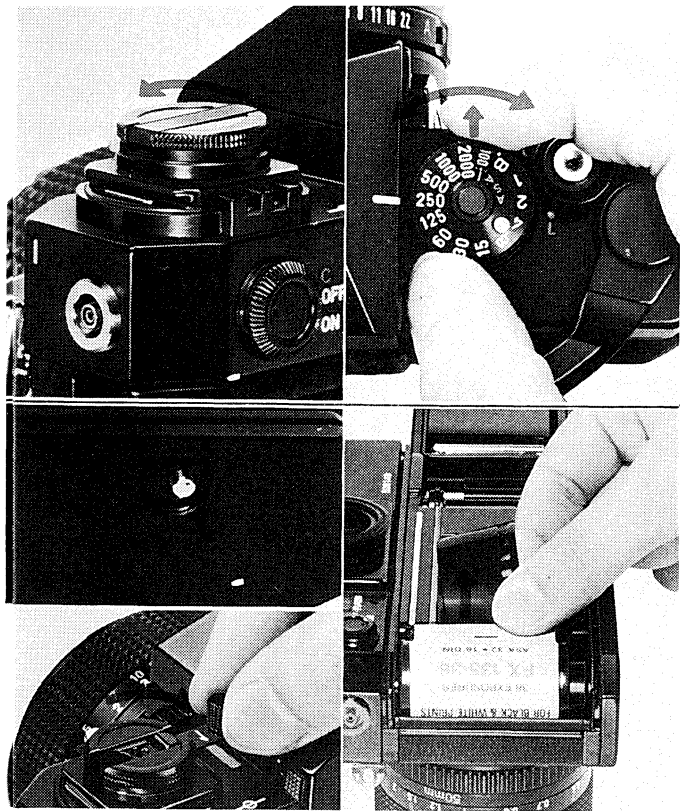
- これをしないとメーターによる適正露出が得られなくなります。

フィルムの 巻戻し

撮影されたフィルムはカメラの中で裸のまま巻取られていますから、巻戻さずに裏蓋を開くと全部無駄になります。撮影後は必ずフィルムを元のパトローネ内に巻戻します。

- 1 フィルムが終りになると、巻上げがきつくなりますから、巻上げを止めます。
- 2 カメラ底部の巻戻しボタンを押込みます。ボタンは一度押せば指を離してもさしつかえありません。
- 3 巻戻しクランクを引起し、巻戻しクランクに刻印された矢印方向に回し、フィルムをパトローネ内に巻戻します。巻戻し中、抵抗が軽くなり、巻戻しボタンの指標回転が止まったら巻戻し操作を止めます。巻戻しはフィルム巻戻し音でもわかります。
- 4 裏蓋を開きパトローネを取出します。

- 巻戻しボタンは、裏蓋を開くと自動的に戻ります。



2	4
3	

- フィルムが終りになっているのに、無理に巻上げるとフィルムがパトローネ軸からはずれたり、切れたりして巻戻しができなくなります。ご注意ください。この場合には、暗室またはダークバッグの中で裏蓋を開いて巻戻してください。

- セルフ
タイマー
- 1 巻上げレバーを巻上げ、シャッターをチャージします。
 - 2 セルフタイマーレバーを下図に示す矢印方向（外側）に止まるまで一杯に回し、
 - 3 シャッターボタンを押してください。
 - 4 はじめにセルフタイマーレバーが作動し、約10秒後に露出が行なわれます。
 - 5 シャッターの巻上げを忘れ、セルフタイマーのみをセットしてシャッターボタンを押しても、全く作動しませんからご注意ください。
 - 6 セルフタイマーレバーは、巻上げ後定位置に戻して、測光に使用することができます。
 - 7 ミラーロックした状態で、セルフタイマーレバーをセットすると、ミラーロックは解除されてしまいます。セルフタイマーをセットしてからのミラーロックは可能です。
- セルフタイマーセットを途中で止めるとシャッターがロックされ押せないことがあり、故障と感違いすることがあります。このときは、セルフタイマーレバーを一杯に回せば解除されます。



フラッシュ 同調

キヤノンF-1はペンタプリズム交換式のため、ストロボ等を直接カメラに取付けることはできません。従って、ストロボなどを取付けるときは、別売アクセサリーのフラッシュカプラーD、フラッシュカプラーFおよびフラッシュカプラーLを併用してください。

フラッシュカプラーDおよびFは直結接点を持つアクセサリーシューですが、アクセサリーカプラーLは直結接点とキャッツ(CATS)コントロール接点及びメーター情報採光窓照明ランプ付のアクセサリーシューです。

(CATS)についてはCATS撮影の項参照。

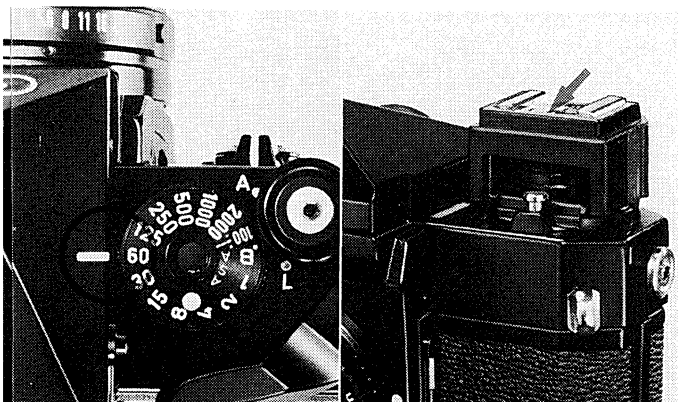
発光器の種類とシャッター速度の使用可能組合せは、次の表のようになります。

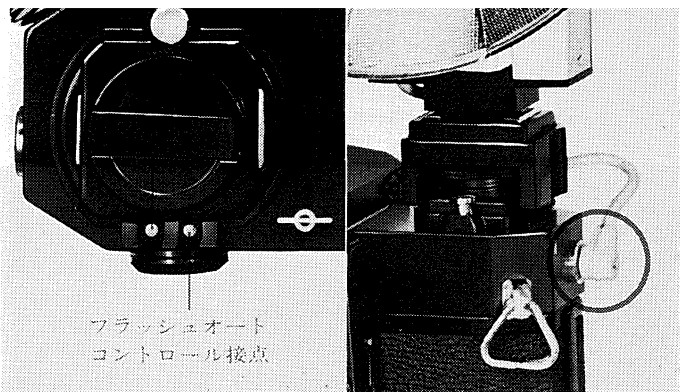
フラッシュバルブ	同調範囲(シャッタースピード)												
	2000	1000	500	250	125	60	30	15	8	4	2	1	B
F P 級	○	○	○	○	○	×	*	○	○	○	○	○	○
M, MF 級	×	×	×	×	×	×	*	○	○	○	○	○	○
スピードライト	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○

*キヤノンF-1のストロボ用X接点は、シャッタースピード目盛 $\frac{1}{60}$ 秒位置が兼用しています。

コード付のストロボや発光器を使用するときは、カメラのフラッシュターミナルにプラグを差込んで使用してください。

フラッシュターミナルはJIS-B型で、ねじ山つきです。





フラッシュオート
コントロール接点

露出の決定

ストロボのマニュアル使用またはバルブ(閃光電球)を使用した場合の露出は、ガイドナンバー計算で決めてください。ガイドナンバーはストロボや閃光電球の使用説明書に記されています。

$$\text{ガイドナンバー計算} : \frac{\text{ガイドナンバー}}{\text{撮影距離}} = \text{絞り値}$$

※ガイドナンバーがメートル表示なら撮影距離もメートルで計算してください。メートルとフィートを混用して計算しないでください。

キャッツ(CATS)撮影

締付けリングを持つ次の4本のレンズ (FD 50mm F1.4, F1.8およびFD 35mm F2, F3.5)を使用して、フラッシュ同調撮影を行なう場合に、キャノンスピードライト133Dを併用すれば、一般撮影と同様のメーター追針式でストロボ撮影をすることができます。

キャノンではこの撮影システムをCANON AUTO TUNING SYSTEM, 略してCATSと呼んでいます。

※キャッツ撮影ではフラッシュカプラーLを使用して下さい。

※キャノンスピードライト133Dは一般の直結ストロボとしても使用できます。但し、露出はガイドナンバー計算で求めてください。



レンズの 取扱い

レンズの交換

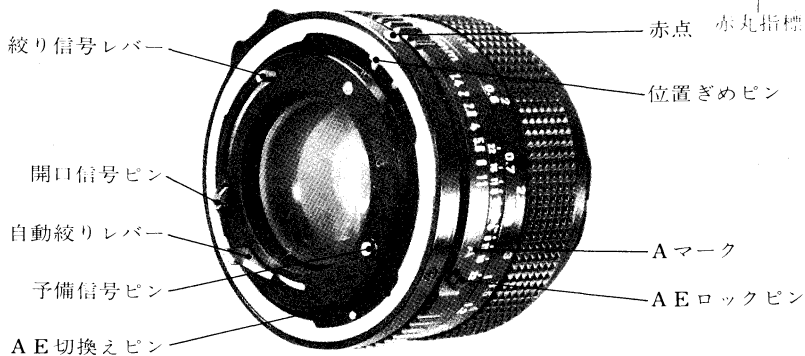
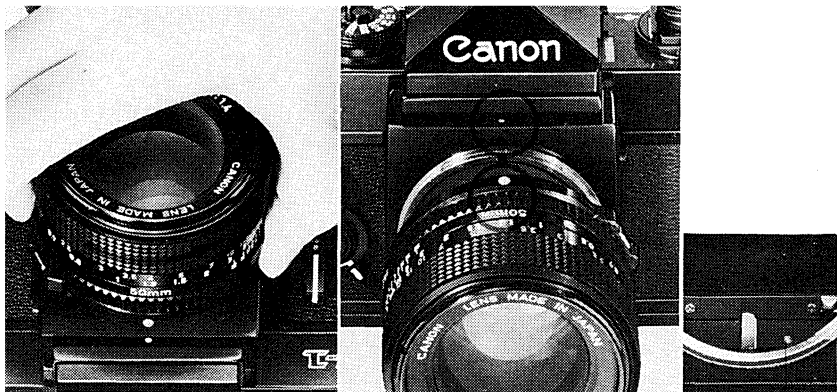
カメラからレンズをはずすには、レンズのレンズ取外しボタンを押し、反時計方向、左回しに回し、レンズの赤指標とボディの赤点が合った位置で前方に引出します。レンズを取付けるには、カメラのマウント部の赤点に、レンズの赤指標を合わせてはめ込み、時計方向に回します。

●レンズ交換には必ず絞込み測光レバーのロックを解除しておきます。ロックされたままの状態ですと、レンズの自動絞りレバーが、ボディの自動絞り作動レバーに連結しない位置になり、自動絞りがはたらかなくなりますから、ご注意ください。このときボディ連動部には不動作を知らせる赤丸指標が見え注意を促します。

同様に自動絞りレバーを手動ロック位置にクランプしたまま取付けると自動絞りがききませんから必ずレバー位置を確認してください。

●交換のさいは、直射光下を避け、素早く行なってください。レンズを取付けず放置しておくと、フィルムにカブリを生ずるおそれがありますのでご注意ください。

●ボディやレンズのマウント部には絞りの作動レバーや各種信号があり、いずれも大切な部分ですから手をふれないでください。またレンズをはずしておく場合は、必ずボディにはカメラカバー、レンズにはキャップをかぶせて保護することを忘れないでください。



レンズ信号

絞り信号レバー 自動絞りのプリセット絞り量をカメラ側に伝達するレバーで、プリセット絞りと1対1の動きをします。通常はプリセット絞りリングを回して作動させますが、プリセット絞りリングをAマークにセットした場合には、カメラ側から動かすことができようになり、サーボEEファインダー使用時やキヤノンAE一眼レフカメラに取付けた場合に利用されます。

開口信号ピン 各レンズの絞り開放値の伝達ピンで、レンズ交換により開放F値が変わった場合でも、開放測光の誤差補正がレンズ装着時に自動的に行なわれます。

自動絞りレバー カメラと連動して、絞りをプリセット位置まで絞込む連動レバーです。手動ロック位置にクランプすると手動絞りとなります。

AEロックピン レンズの絞りが不用意にAマークに動かないようにする安全ピンです。AマークにセットするにはAEロックピンを押しながら絞りリングを回します。

AE切換えピン レンズ絞りをAマークにセットすると出てくる信号ピンで、AE機構伝達ピンです。カメラ側にAE切換えピン受けのないカメラやチューブに取付けることはできません。

※Aマークのセットはカメラやアクセサリーの指示に従ってください。

●レンズの泡は、明るさを何百分の1か、何千分の1か減らすことにはなりますが、この程度では撮影上、全然問題になりません。また像の鮮鋭度にも何ら影響がありません。

距離目盛

距離目盛はピントを合わせた被写体とフィルム面との距離を示すものです。普通の撮影では必ずしも必要ありませんが、被写界深度を知る場合や、赤外線撮影あるいはガイドナンバーを使用するフラッシュ撮影などに必要です。目盛は1桁数字の距離ではその文字の中心、2桁数字では2つの文字の間、3桁数字では中央文字の中心がそれぞれ正しい目盛位置になっています。

赤外マーク

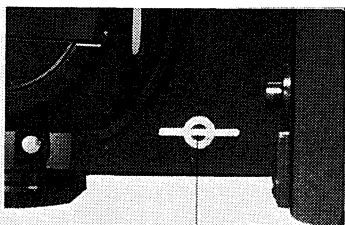
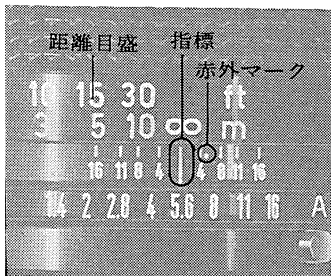
赤外撮影のときは、ピント位置が普通撮影よりも多少ずれますから修正しなければなりません。赤外マークはその修正指標です。やり方は、まず普通にピントを合わせ、その距離目盛を読み取り赤外マークに合わせるだけです。たとえば、ピントを合わせて距離目盛が10mとすると、この10の目盛を赤外マークの位置までずらせばよいわけです。マーク位置は800m μ 程度の波長に最大感度をもつフィルムと赤外フィルター、たとえばコダックIR135フィルムとラッテン87フィルターとを用いる場合を基準にして目盛っております。

フィルム位置マーク

レンズの距離目盛は、フィルム位置から測定した距離が目盛っております。したがって、実測によってピントを合わせる場合には、フィルム位置マークから測って、その距離をレンズの目盛にうつします。一般撮影にはあまり必要なく接写、複写時にアクセサリーの使用表により、実測してカメラ位置をきめるのに利用します。

FD レンズマウント (FLレンズとRレンズ)

キヤノンF-1のレンズマウントはFLレンズのすべてが共用できます。(ただしFLP38mmは使用できません)そして自動絞りが連動し絞込み測光ができます。また従来のキヤノンフレックス用R交換レンズも使用が可能ですが、自動絞り機構が異なるため撮影は手絞りで行ない、測光も絞込みにより測光レバーを併用します。



フィルム位置マーク

被写界深度目盛

ひとつの被写体にピントを合わせると、その被写体の前後で鮮明に写る範囲があり、これを被写界深度といいます。その範囲は撮影距離と絞りの大きさによって変わりますから、距離目盛に関連させて、絞り数値が目盛られています。

F8に絞った場合

被写界深度目盛の使い方は、たとえば50mmレンズで3mの距離にある被写体にピントを合わせ、F8の絞りを使うとすれば、下図のように距離指標の両側にある8の目盛に対応する距離目盛、すなわち約2.3mと約4.3mとを読み取ります。そして、この間にある被写体が鮮明に写ることを目盛から知るわけです。

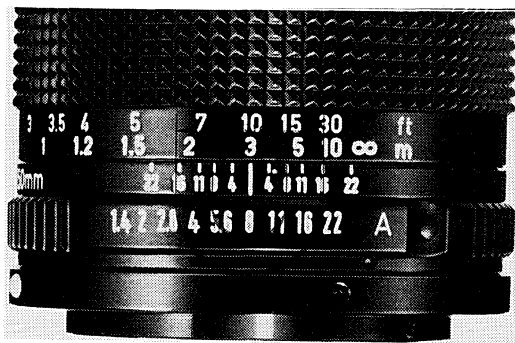
F16に絞った場合

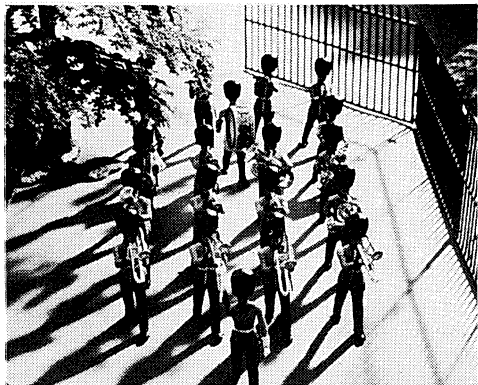
同じくF16に絞れば約1.9mから約7.6mまで鮮明に写ることがわかります。

被写界深度の性質

被写界深度には、次のような性質があります。ある被写体にピントを合わせると、前方よりも後方に深く、レンズを絞るほど、また撮影距離が遠いほど前後に深くなり、逆の場合ほど浅くなります。同じ撮影距離で同じ明るさ(Fナンバー)を使用する場合、焦点距離の短いレンズほど、被写界深度は深くなります。

キャノンF-1で深度を観察するには、絞込み測光レバーを倒してファインダーをのぞき、絞りリングを回します。





ミラーのはね 上げロック

超広角撮影や顕写などでは構図をきめたのち、なるべくショックを与えずにシャッターを切る必要がおこります。このような場合にはミラーを上方に固定して、ミラーによるショックを減少させることができます。

ロックのしかたは、絞込み測光レバーを倒し、測光ロック状態にしてから、さらにミラーロックレバーをM位置に回します。これでミラーが上方に固定されます。

測光レバーのロックは確実に行なってください。ロック不十分の場合ミラーが上がったままになることがあります。

ミラー固定での撮影は、手動絞り撮影の状態になり、シャッターのみ作動します。

キヤノン F L 19mm F 3.5 レンズを使用する場合には、レンズが後方にでているため、レンズ取付け前にミラーロックを行っておきます。このレンズ使用のときは別に専用ファインダーが必要です。

ミラーロックの解除は、ミラーロックレバーをM位置から白指標位置に回します。ミラーは自動的に戻り測光ロックも解除されます。

●ミラーロックはシャッターの巻上げ、シャッタースピードに関係なく行なうことができ、またフィルムの無駄送りもありません。

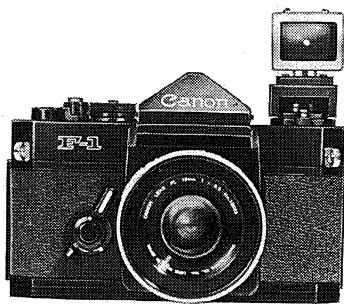
●ミラーロックを行なったときは、一眼レフカメラとしての機能を失います。また距離合わせが目測になります。

●ミラーロックをしたままで撮影しないときには、レンズに必ずキャップをしてください。長く放置するとフィルムにカブリを生じます。

●利用後は、必ずミラーロックレバーを戻してください。

●ミラーロック時に1/2000秒は使用できません。

●ミラーロック後にセルフタイマーをセットするとミラーロックが解除されます。



多重露出

同一被写体あるいは異なる被写体を同一画面上に写込むことを多重露出と言いますが、キヤノンF-1は必要に応じ多重露出を可能にしました。多重露出は夜空を色彩る花火の撮影や教育用スライドの作成などには欠くことのできない機構と言えましょう。

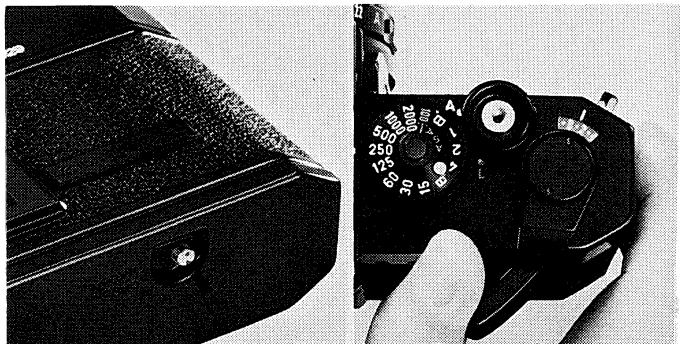
巻戻しクラックを軽く回して、フィルムのたるみをとっておきます。

- 1 1回目の撮影を行ないます。
- 2 カメラ底部の多重露出ボタン（巻戻しボタン兼用）を押込みます。（ボタンは指を離しても押込まれた状態になっています。）
- 3 巻上げレバーを巻上げます。フィルムはそのままシャッターチャージが行なわれます。巻上げレバーを回すときは、静かに1作動で行なってください。小刻み巻上げはさけてください。

以上の操作を繰返し行なえば何回でも同一画面に被写体を重ねることができますが、場合によっては多少画面がずれることがあります。

多重露出をする場合の露出値は通常の場合と異なり、多重露出の回数と被写体条件によって一定の値を求めることはできません。

露出の求め方にはフィルム感度セッティングによって行なう方法と手動絞りによって行ない方法がありますが、いずれの場合も、多少の勘や経験を必要とします。また撮影をする順序は黒っぽい被写体から撮影するようにし



の方が効果的です。

多重露出をした場合はフィルムカウンターは巻上げレバーを回すごとに1目盛進みます。

モータードライブを使用して多重露出はできません。

キヤノンフィルターのおすすめ

レンズねじ径に応じて各種フィルターが用意されており、黑白フィルム、カラーフィルムに対してそれぞれ特有の効果をあらわします。

キヤノンF-1の露出計はTTL方式ですから、露出倍数の補正は全く必要ありません。撮影効果をより高めるキヤノンフィルターをぜひお備えください。

種 類	フ ィ ル タ ー 効 果
UV (SL39・3C) 黑白、カラー共通	・紫外線だけを吸収し、各色光には無影響です。海浜高山などの紫外線の多いところでは特に有効です。カラー撮影の常用フィルターとしてもおすすめします。
Y1 (SY44・2C)	} 黑白用
Y3 (SY50・2C)	
G1 (MG55C)	
O1 (SO56・2C)	
R1 (SR60・2C) 黑白、赤外共通	
スカイライト } 黑白 ND4 ND8 } カラー共用	・青空や木蔭の色を自然に近づける作用をします。 ・ND4は1/4、ND8は1/8に光量を減じます。カラーの色再現性には全く影響がありません。
PL-L(偏光)黑白、カラー共用	・非金属物質の反射(偏光)を除いて、鮮明な画像が得られます。
カラーコンバージョンA(12相当)	・タングステンタイプフィルムの転換用
カラーコンバージョンB(12相当)	・デイライトタイプフィルムの転換用
カラーコンバージョンA4	・デイライトタイプの曇天用および晴天日影用
カラーコンバージョンB4	・デイライトタイプの朝夕用
カラーコンバージョンA8	・タングステンタイプ朝夕用
カラーコンバージョンB8	・デイライトタイプと人工光フラッシュ

底蓋，裏蓋 のはずし方

底蓋

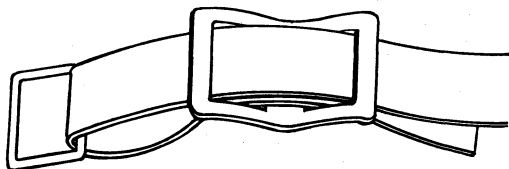
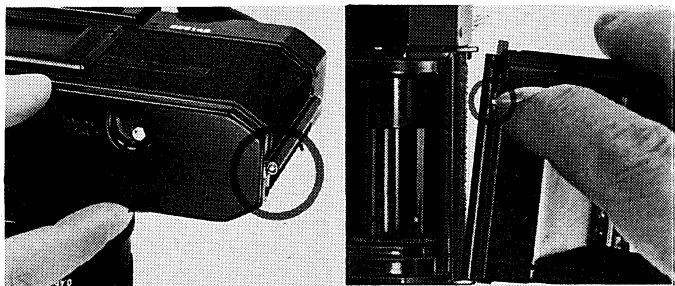
底蓋は，モータードライブ及びパワーワインダー装着時のために取りはずし可能です。水銀電池室蓋をはずしてから引くとはずせますが，必要時以外にははずさないでください。

裏蓋

裏蓋はフィルムチェンバー 250 を取付ける場合のために取りはずし可能です。蝶番のピンを下に押下げるとはずせますが，必要時以外にははずさないでください。

ストラップ

ストラップ先端が内側に来るように折り曲げて金具に通してください。反対に取付けるとカメラがはずれる場合があります。



カメラの保管と手入れ

カメラの保管：カメラは湿気やほこりを嫌います。長い間しまい込んで放置しておく、シミや錆を生ずることがあります。むしろ、しばしば使用して外気に触れさせてください。

保存の場合は、水銀電池を抜き、さらにケースからはずしてください。

カメラの手入れ：野外で使ったカメラは塵埃が付きやすく、また雨の日や海辺で使ったあとは、気付かなくても水滴や塩分を受けてシミや錆を生じたり、レンズのヤケや腐蝕の原因になります。そのようなときには柔かい刷毛でほこりを払い、乾いた柔かい布で丁寧に拭いてください。レンズにはなるべく手を触れない方が無難で、ゴム球付きのブロワーで吹飛ばすか、柔かい刷毛で軽く払う程度にしてください。

やむをえないときは洗いさらした柔かい清潔な布を棒に細く巻き、先端にわずか湿る程度のアルコール（エーテルを少量まぜればなお可）をつけ、レンズの中心から外側に渦巻きを描くようにして軽く拭きます。強く拭いたり、ほこりの付いているまま拭くと、かえってキズを付けますから注意が大切です。

フィルムのカスがたまと画面のよごれや事故の原因になります。お早目に手入れにお出してください。

- カメラを海中に落したときは、ほとんど修理不可能です。この場合はカメラ材料店もしくは弊社サービスステーションにご相談ください。
- 極寒地では、カメラを撮影時以外に直接外気に触れさせないよう保護し、また手早く撮影を済ませるのが望ましいことです。そうすれば機能を落とさずに済みます。また冷えたカメラで撮影する場合、急激に温い室内に入れたり、照明などで急速に温度を上昇させると水分の凝結でレンズが曇り、撮影できないことがありますのでご注意ください。
- 使用しないときは、レンズの保護のため、レンズキャップをつけてください。また水銀電池の消耗を防ぐためメータースイッチを **OFF**・**FLASH** にしておいてください。

高温注意

カメラを高温の場所に放置しないようご注意ください。たとえば乗用車のトランクやリヤウインドなどは高温になることがありますので、放置したままにするとカメラ故障の原因になりますから絶対にさけてください。また、キャップをはずして直射日光にさらしたままにすると、フィルムにカブリを生じます。ご注意ください。

従来のシステムカメラは、長期的な見通しにたって開発されたものでなく、ややもすると個々にアクセサリを揃えただけのものでした。キヤノンF-1は、開発当初から純然たるシステムカメラとして、未来展望のもとに、あらゆる可能性を、想定、追求して設計、製作したカメラです。

そのシステムは40本以上の交換レンズとファインダーシステム、モータードライブシステムをはじめとする、180種以上のアクセサリをそろえるものです。

アフターサービスについて

1. 保証期間経過後の修理は原則として有料となります。尚、運賃諸掛りはお客様にてご負担願います。
 2. 本製品の補修用性能部品（製品の機能を維持するために不可欠な部品）は、日本国内において、10年間を目安に保有しています。したがって期間中は原則として修理をお受けいたします。尚、故障の原因や内容によっては、期間内でも修理が困難な場合と期間後でも修理が可能な場合がありますので、その判定につきましてはお買上げ店又は、裏表紙記載の当社サービス機関にお問合せ下さい。
- ★修理品をご送付の場合は、見本のフィルムを添付する等、修理箇所を明確にご指示の上、十分な梱包でお送り下さい。